『其時イエス答へて曰ひけるは天地の主なる父よ此の事（宗教的究畢の眞理）を智者達者に隠くして赤子に顯はし給ふを謝す。父よ然り此の如きは聖旨に適へる也』と。何等深奥の感應ぞ。何等超越の高調ぞ。之れ既に修養の境ではない、工夫の地ではない。修養を超じ工夫を空じて立てる眞箇靈感靈交の本面目だ。由來修養と云ひ工夫と云ふ自家經營の痕跡を含み、努力着意の響きを聞く。宗教上の一等地に立て本地の風光を觀じ來れば是等心上の芥塵は既に一箒し去られて靈感靈想雨の如く照り光の如くこぼるゝの地に立つべきだ。これ宗教者の本來の面目ではないか。これ神人基督の仰ぎ立てるの地。こゝ神秘の靈韻は宇宙の音樂と化して基督の心耳に響きつゝあつたではないか。世の所謂『智者達者』の識味し體達し能はざる此の無碍の一道は一切を放擲して感應の靈火に浴せし基督の如くにして初めて此の融和靜穩の恩化に泳ぐべきである。然りこゝ悠々として泳げるの境だ。『靈は靈を知る』と云ふではないか。『淵は淵を呼ぶ』と云ふではないか。神人基督の心靈は今や無限の光波



をあびて、靈海千波萬波の光景を見る。何等深遠の心證ぞ。

## 6　全人格の風光

智者何處に在る。此の世の論者何處に在ると絶叫せる聖者の體達したる此の天風一振の光景は、さながら芙蓉山上の第一峯に立て手に星を捫して天上の天を麾き、脚に雲を蹈んで域外の域に盤る樣なもの。洞然たる六合の大景は彼が心證のうちに落ちて居る。『父は我に萬物を與へ給へり』との大意識は天地を包容し乾坤を呑吐して更に自由曠蕩を極め、而かも敬虔一味の溫情意識の深淵より流れて春風花に薫ずる所の趣がある。心靈の窓一たび開けて靈界無限の曙光に接し、幽香脈々として我心靈の衣袂に通ふ此の幽渺の思ひ、神の裳にそと觸れし此の清高の感。何等の文字か此の消息を傳へ得べき。詮ずる所は絶言亡慮だ。不立文字だ。不可稱不可說言語道斷の境だ。宜なる哉基督が這箇の端的を道破して『父の外に子を識るもの無し』

と云ふや。此の獨闘獨創の意識は實に千聖不傳の神秘である。而かも基督の此の刹那の意識は父の外に識る者なしと雖も、基督に此の獨闘の意識を與へ給ひし神の意識は『子及び子の顯はす所の者』に於て尙ほ之を直覺し得べしと云ふに至りては何等の恩寵ぞ。基督の此の意識の尊嚴は彼をして『凡て勞れたる者また重を負へる者は我に來れ我汝等を息ません』との救世の召喚となりて現はれたではないか。救世の召喚は最深の意識より來る。こは天來の聲だ。無聲のインスピレーションだ。此の神子獨尊の權威は彼をして靈界の大勝利者として古今に卓絶せしめたではないか。これ豈『鬱密深沈として獅子のみ住す』と云ふ古禪者の風唱せし栴檀林の靜境より流れ來る凱歌の聲ではないか。

基督の禪機の圓現は更に一歩を進めて『我は途也眞也生命也』と云ふ宗教的無上の高調に至りて極つてゐる。吾人は敢てこれを宗教的無上の高調と云ふ。如何となれば由來宗教の眞理は抽象的、論理的の概念的眞理にあらず。從來の哲學や神學が



多く眞理を抽象的論理的の一面にのみ思索し來つたのが、其の誤謬の伏在せる所以だ。宇宙本來の眞理は論理上の概念によりて論究すべきものではない。直往直覺宇宙の本質に迫り『我は即ち眞理也』『我は即ち生命也』との見地に立て眞理を全人格の風光中に活識し來るにあらずんば決して人間本來の要求に響くものではない。此の點に於て基督が『我は眞理也』と宣言して『我』と『眞理』とを融合し來りて神秘莊嚴の眞實なる『我』に宇宙の眞理を體得したる所。惟ふに古今獨歩の境界と云はねばならぬ。

## 7　神人融會——變貌の光耀——最後の一閃

『我を見し者は父（宇宙の神）を見し也』と云ふ基督の意識は宗教的意識現象の中核である『我の我』である。基督の意識には不斷に神秘なる實在の深き脈搏を見る充實せる神の生命の聲を聞く。これ神が基督にインカルネーション（化身）として現

はれたりと見得べきの境だ。而かもこれ乾燥せるドグマに有らずして、肉の如く躍り血の如く湧きに湧いて己まざる活ける現實の事實だ。これ『我爾曹に語りし言は自ら語りしに非らず我に居る父其の行をなせる也』と云ふ所以だ。既に『我に居る父』と云ふ彼の意識は神を以て充實せられたのだ。彼の意志は神の意志を以て占領せられたのだ。彼は彼にあらずして神と成つたのだ。然り彼は茲に神と一つになつたのだ。

これを神人の融會力と云はんか、一如力と云はんか、大宇宙的意識の統一作用と云はんか。あらず、あらゆる文字言語を以てしても此の如實の境を如實に言表せんは實に吾人に取りて不可能事だ。一切はこゝ體驗に入る。實參だ。透脫だ『神と我とは一也』と云ふ此の『一』と云ふの外一切の文字は無用だ。基督の圓轉滑脫の拈提も『一』と云ふの外、其の意識詮表の形式がなかつた。

ヘルモン山上の神秘的變貌の光耀は光明遍照の現實境だ。イルミネーションだ。



エルロイヒツング（Erleuchtung）だ。禪者の所謂『見性』と云ひ『開悟』と云ふ所のものより更に一頭地を擢でたるの本地。新プラトン派の所謂『恍惚境』以上の境だ。神秘家エックハルトやヤコブ・ベーメやテレサやイグナチウスや彼等が經驗せしと云ふ宗教的意識の光耀は各其の內容を異にするものあるべしと雖も彼等の個々の宗教的實驗の眞實たるに於ては一だ。

此の宗教的意識の遍照境は心靈無限の向上だ。靈覺だ。超徹だ。透入だ。而かも此の宇宙最深の新事相が茲に新風光の眞理として啓示せられたのだ。然り啓示だ。レヴェレーションだ。オッフェンバールングだ。而も此の啓示やエマルソンの所謂『心靈の開示也』（Sevelation is the disclosure of the soul.）最も深き啓示は心靈の開示だ。發露だ。客觀的に之を言へば一切の宗教的眞理は啓示なりと雖も之を主觀的內觀よりして言へば一切の啓示は心靈の創造であり開發であると云はねばならない。『一切の創造は一切の發見也』との宗教上の眞理は頓て一切の啓示は一切心靈の開

發也發露也との甚深微妙の玄旨を加へ來るのだ。こゝに主觀は客觀と相抱擁し無限の時間は無限の空間と相握手する。此の境空際一物の吾人の眼を妨ぐるものなく千里皓蕩として渺々たりだ。靈界の煙波縹渺として一切は心靈の洪波中に溶けて、洋々として流るゝあるのみだ。嗚呼、何等淨嚴の一境ぞ。これエマルソンが『心靈は萬有を圍繞す』と云ふ所のもの。此の一境は一切の經驗を空じ一切の時間の上に出で一切の空間を超じて、神と人と相靈感する。超絶だ而かも包擁だ。靈妙だ而かも現實だ。こゝ超絶的意識と內在的意識とは相抱合して永刧は刹那に集り、刹那は永刧を包み、時間的にして而かも超時間である。宇宙的永遠の美を愛する心のみこゝには花咲きつゝある。玆に人生は凡て久遠の時代に屬し人間は全く心靈其のものとなる。心靈一たび時間の制約を飛躍して一超直ちに如來地に入り、江月照らし松風吹く永夜の淸宵を觀せんか、深奧なる靈響何處ともなく流れ來りて、こゝ詩と音樂と信念との三者は相調和して宇宙の一大ハーモニーを渾成する。これ美と聖との接



觸する所、幻と實との融化する所。宗敎と藝術との融和する所。神と詩とは此處に握手する。これ唯神與神の境だ。基督のヘルモン山上の變貌の光景は正に此の端的の一境を道破せるものではあるまいか。

基督の救世の大使命は最後に十字架上の一閃光に於て集中した。基督の意識より迸り來れる全人類に對する炎々たる猛火の如き熱愛や沈々たる靜湖の如き洞觀や、今や凝りて十字架上の鮮血淋漓たる莊嚴悲壯の大活劇中に神の如く活躍してゐる。神の大愛は生命となりて十字架上の基督の鮮血となつて花咲いた。十字架に於ける基督の禪機は人類に對する無限の愛の化身たる涙の光となつて現はれた。誰か禪機に涙なしと云ふ。神人の禪機は野狐禪のそれではない。全人格の眞風光が渾身の涙となり愛となり生命となり光明となりて輝き來つたのだ。十字架上の基督は愛の神として現はれたのだ。第四福音書の記者が『それ道肉體と成りて吾儕の間に寄れり我儕其の榮を見るに實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり』と

說破せるもの正にこれ十字架上の基督に於て其の榮光の圓現せるを見る。贖罪論者のドグマを以て之を云爲せんは吾人の取らざる所。而かも現實なる十字架上の基督に於て吾人は充實せる『眞理』と『恩寵』との無限の大愛の滴りの吾人の心靈に泌み入りつゝあるを見ずには居られない。



# 第七章　保羅の禪機

## 1　王者的宗教

吾人は既に基督の禪機を見た。今や更に進んで保羅（パウロ）の禪機に就て語つて見やう。保羅は彼が宗教的實驗を經て體得したる一境を拈提して曰く『溢るゝ恩寵と義の賜とを受くるものは一人の耶蘇基督により生に在りて王たらざらんや』と。生に在りて王たりと云ふ。今之を獨逸ワイッエッケルの新譯によれば『生に於て王者として統治す』との義。永遠の生に於て王者として統治すとの絶大なる宗教意識は保羅の全人格を占領して彼をして『萬物は我曹の物也』（哥前三ノ二十一）『我儕は宇宙のもの也』（哥前四ノ九）との意識に達せしめたるものと謂ふべきだ。これ豈禪者の所謂『王坐禪』の一境に在りて『五帝三皇是れ何物ぞ』との大見識を發揮して一切の權威を

脚下に踏へて立つ堂々たる風骨と相對して正に好箇の對照ではないか。一切の聖位を蹈んで立てる聖者の人格は王者的宗教の意識として現はれ來り、一切の萬有を下瞰して而かも照觸無碍の奥旨を體して、信念の一等地に立てる高懐の風丰優に欽仰に價せずとせんやだ。こゝはこれ眞に新生命に優悠自適せるの境。死の一線を超えて更に生の一境に萬法齊觀の靈趣を味ふ。これ保羅の所謂『凡てのもの我に可らざるなし然れども我其の一をも我主となさず』と云ふ萬有皆美の靜觀に立て而かも一切の上に超然たる靈動活躍の實驗境を告白したるものと云ふべきではないか。聖者の謂ふ所の動中の靜觀。靜中の動觀は奇しくも此の一句の中に圓現せられつゝあるではないか。之れ『一句了然として百億を超ゆ』と云ふ所のものではないか。これ豈法中の王最も高勝なる王者的禪機の發揮ではないか。『爵密深沈獅子〻住〻』と云ふ禪者の達觀したる全機大用の姿は保羅の實驗したる所のものと相似て居るではないか。吾人は此の王者的宗教意識の煥發たる保羅の禪機の根底に『溢るる恩寵と義の



賜』との潜在しつゝある事を忘れてはならない。此の無限の恩寵や賜や一たび耶蘇基督の靈格を通じて流れ來るとき、こゝに此『永遠の生』を識得して王者の意識に達す、之れ禪者の意識のそれと相似て而かも相異る所のものだ。保羅の達觀は恩寵より來り、禪者の達觀は大悟より來る。彼は他力の中に此恩寵を味ひ、こは自力の中に此全機を了す。是に於てか禪機の發露は宗教的眞理の内容によりて其色彩を異にするを見るのだ。

## 2　最高要求

保羅の此の王者的宗教意識は實に神子的自覺の内部的悟入の心證よりして顯はれ來つた。一切の人類を觀じてこれ神の子なりとの眞理は理知の上に於て之を認識するは敢て困難の事ではない。而かもこの神子的自覺を心證上の直覺に照して色讀體得するに至りては、こは實にこれ心靈上の勇者の雄々しき實驗によりて始めて此の

境に達し得らるべきだ。保羅の宗教的實驗は彼をして『凡そ神の靈に導かるゝ者は是れ即ち神の子也。爾曹の受けし靈は僕たる者の如く復び懼を懷く靈に非らずアバ父と呼ぶ子たる者の靈也。聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す』と云ふ甚深微妙の一境に立たしめた。此の神子の自覺を握れる者は一切の宗教上の眞理の秘訣を握れる者である。此の意識を外にして人類の生命たる本質は他に之を求むるを得ないのだ。保羅が內部心靈上の直覺は彼をして此の新啓示に觸れしめた。詮ずる所宗教上の最高の要求は此の內在の神性を發揮し圓現し完成し實現するに外ならない。神性を實現するそこに宗教的新實驗は新啓示として現れ來る。此の直覺のある所宗教的眞理は無限に新啓示の色彩を帶びて現はれ來る。保羅が內部要求の聲は今や新啓示として彼が靈性上に此の神子の自覺として現はれ來つて自證の印可を彼自身の心靈に與へた。これ禪者の『此の心是れ本源淸淨佛也……深く自ら悟入すれば直下是れ圓滿具足して更に缺くる所なし』と云ひ『諸佛と一切衆生と唯是れ一



心にして更に別法なし』と云ふ、此一心の本來の光明を發揮し一念心上に此の自佛の境界を自證したる所のものではないか。唯だ保羅に在つてはこれを神子と云ひ禪者にありては本源淸淨佛と云ふ。これ一は人格神の信念より來り一は汎神論の理觀より來れるの差異なりと見るべきのみだ。而かも此の自覺の證入は保羅をして更に『我儕若し子たらば又後嗣たらん、即ち神の後嗣にして基督と偕に後嗣たる者也』との法脈を自得せしめた。あゝこれ何等の天空無碍の一境ぞ。神子の自覺に入りて神の後嗣の境に立つ、あはれ靈光淨嚴の天地にもある哉。これ神の子等の自由なる榮光の國ではないか。これ禪者の『法は即ち以心傳心皆自悟自解せしむ。古より佛々惟本體を傳へ、師々密に本心を付す』と云ふ嫡々相承の本旨を語るものと云ふべきである。

## 3　生活即宗教

宗教上の眞理は之を吾人日常の生活中に於て求むべきもの。若しそれ根源を識破し玄底に沈潛し來らば現實の生はやがてこれ理想涅槃の淨土と化し一切の萬有は靈光無碍の光明と照り輝くのだ。これ聖者保羅が『道は爾に近く爾の口にあり爾の心に在り』と道破して宗教的眞理の究畢地を吾人の生活裏に求めたる所以だ。これ王陽明が所謂『尋常茶飯玄中玄』と云ふ所のものではないか。禪者は此の玄中の玄を日常平凡中に觀じて現實の眞相即ちこれ宇宙の聖意なることを達悟して『平常心是道』と云ふ凡聖不二の眞諦を以て宗教的眞理の第一義となす。これ臨濟禪が『飢え來れば飯を喫し睡り來れば眠を合す、愚人は我を笑ふ、智は乃ち焉を知る』に云ひたる所以であつて、古聖の所謂『心は萬境に隨て轉ず轉處實に能く幽なり』との深奥なる眞理を味ひ來れば吾人は一切到る處として道の靈姿に觸れ神の聖光を仰ぐべきである。凡中聖意を發揮し一切の現實と離れずして現實其のものゝ中に甚深微妙の理想の光を體認する。これ宗教者の正に至るべき辿るべきの境地にしてここ實に



廓然無聖の境地と云はねばならぬ。而かも之を語るや早く既に理知の第二義に落ち去りて其の靈趣を直下に識得する事不可能だ。轉處實によく幽なりと云ふ。此の『幽』の一味正にこれ心靈界の消息を洩らす所のものと謂ふべきだ。『願性常住無處トシテ不レ周カラ』と云ひ、又『淸風匝地有ニリテ何ノ極カ』と云ふもの此の眞理の實相を詩的表現を以て歌ひたる所のものと云ふべきだ。禪の極致は宇宙の眞理を詩的象徵に於て語る所のものである。凡そ一切の深遠なる眞理は之を文字に現して說明し解釋するに當りてや、說明其のもの解釋其のものの爲めに既に其の豐富なる內容の充實せる生命を束縛せられて如實に其の光景を語る能はざる所のものだ。これ禪者が如是觀に對して多くは『不能語』の境として心行所滅言語道斷と云ふ所以のものだ。これを形式的方面よりして見れば正に眞理の消極的態度に過ぎないやうだが、其意義內容の實參的方面に於て形式以上の充實なる積極的態度と云はねばならぬ。禪者の所謂『不識』の端的の一閃光とも云ふべき所のもの此の內面の實驗的眞理を脫體現成

せし所のものと云ふべきだ。これ一切の言語に轉ぜられずして而かも眞理其のものの當體を如實に現前し體得したるものでなくて何であらう。これ『我問はん彼等は未だ聞かざりしか、聞けり、其聲は遍く世界に出で其の言は地の極にまで及べり』と云ふ語らず言はざる無聲の聲ではないか。これ維摩の一默と其の趣を同うするものではないか。

## 4 情感の神

保羅の宗教意識の根底には彼の神觀が有つた。彼曰く『あゝ神の智と識の富は深い哉。其の審判は測り難く其の踪跡は索ね難し』と。これ彼が宗教的實驗によりて感じ得たる神の智と識との富に對して嘆美したる讃仰の聲だ驚異の詩だ。然りこれ感じ得たる神だ。玆に保羅は情感の心鏡に映じたる神を見た。由來宗教の神は理觀の神にあらずして靈的情感の神だ。人間の心靈に響きし宇宙的心靈の聲だ。此の直



觀洞識なくして神を解し神を語らんは宗教上に於ては不可能だ。若しそれ理知の一面より解釋したるの神は宇宙の第一原則絶對法則として冷たき抽象的概念の輪廓として吾人の前に現はれ來ることあらんも、宗教的色彩を帶びたる內容豐富なる神としては所詮は無意味だ。內容の空蕩々たる輪廓的の神は吾人の神ではない。この意味に於て吾人は我が保羅が、造詣深き哲學上の知識に訴へて哲學的概念的の神を解かずして直に『萬物は彼(神)より出で彼に倚り彼に歸る』と云ふ極めて單純にして而かも最も深奥なる一句よりして彼の神觀の總てを語りしに向て無限の趣味を感せずには居られない。又曰く『我儕に於ては唯一の神即ち父あるのみ、萬物これより生り我等これに歸す』と。之れ亦前者の思想を反覆したるものに過ぎない。此直截明瞭なる一句は彼が無限に深き宗教的實驗の流れとして溢れ來つたもの。

禪者は其の佛觀に於て保羅の如き人格的の神觀を有せしものではない。其の佛觀たるや汎神的思想の流れとして常に無相の佛を說く。而かも其の『如何なるか是れ

佛』との問に對して『巧に畫けども似ず』との一句を以て答ふ。禪の佛陀は絶世の大藝術家が其の全人格の全力を打ち出して描寫せんとするも、猶ほ其の眞相を描き出す能はざる底の無相の佛だ。而かも此の無相の佛は人格を撥無するにあらずして人格てふ色彩を以て描くべく餘りに幽玄なるを以て超人格の實在として之を觀じたものだ。『第一義如何か觀せん、佛祖も窺覦するに門なく梵釋も讃仰するに分無し』と絶海の歌ひたるもの此の無相絶對の眞理を拈出したる所のものではないか。此の恢々として十處に彌綸し、蕩々として三際に廓通し而かも其の體見るべからず其の德名くべからざる宇宙の實在はこれを宇宙萬有の歸一する人格的實在者と見るに於て却て其の有限的人間の宗教的要求に應ずる所のものではないか。人格と云ひ超人格と云ふ所詮は有限的意識の絶對に對する眞理表現の色彩に過ぎない。之を人格的に描寫し來りて其の内容の豐富を味ふと、之を超人格的に觀じ去りて其内容の空蕩々を體すると何れが宗教意識の要求に深き感應を與ふべき。吾人は此の點に於ては



禪者のそれを取らんよりは、寧ろ人格神の人間心靈の活ける宗教的要求の聲なるを識得したいのである。

## 5 萬有皆淨

保羅の宗教意識は更に『萬有皆淨』の一境に入つた。曰く『我は主耶蘇によりて凡てのもの潔からざるなきを知り且つ之を信ず』。これ維摩經に說く所の『若菩薩欲レバ得ント淨土ヲ、當シ淨レ心ヲ、隨フ其ノ心淨キニ、則チ其ノ佛土淨シ』と云ふ所のものと正しくも相通ふ所のものがあるではないか。其の心の淨きに隨て則ち佛土淨しこの宗教上の悟入境は禪者のそれと保羅の意識と兩々相靈交し相感應する所のもの。保羅は『主耶蘇によりて』と云ふ。これ基督的意識を以て一切に對したる心狀態を云ふではないか。これ即ち其の心を淨ふしたるの境ではないか。ペテロが『神の潔めたる物を爾潔からずとする勿れ』との天上の聲を聞きし所のものではないか。基督は『我

潔ければ爾曹も潔し』と說き給ふた。宗敎的達觀の聖者よりして見來れば一切の萬有は靈光の充ち滿ちたる神の世界佛の淨土である。此の神の世界に入り此の靈光に觸れ萬有皆淨の見地に立て一法一塵の姿を見る。何等の靈趣ぞ何等の恩寵ぞ。保羅の禪機は玆に萬有齊觀の觀美的意識と流れて敬虔一味の信念と共に彼が心靈は宇宙の實在と渾化し融化して純潔淸高の靈感に入る。これ禪者道元が『遍法界皆佛印となり盡虛空悉く悟となる』と云ひ『一時に身心明淨にして大解脫地を證し本來面目現ずるとき諸法皆正覺を證會し萬物ともに佛身を使用して速かに證會の邊際を一超して……一時に無等々の大法輪を轉じ究畢無爲の深般若を開演す』と云ふ絕妙の正覺に入れる心證ではないか。

## 6　證入の心境

されど保羅の宗敎的意識の最も深邃にして而かも最も神秘なる禪機とも見るべき



は彼が哥林多前書第二章に於て實證したる宗敎的眞理なりと云はねばならぬ。

彼先づ提唱して曰く『我が言ひし所また我が宣べし所は人の智慧の婉言を用ゐず唯靈能の心證を用ゐたり』と。由來宗敎上の自家證入の本地は言語を絕し文字を空じ直ちに靈を以て靈に應へ心を以て心に語るの外なきのみ。今や保羅は其の深奧なる實驗を語るに靈能の心證を用ふ。これ實に千聖も不傳の玄旨にして心路を絕し妙悟に入つて直觀直往すべき打成一片の境だ。これ直ちに人をして心地を開明し本分に安住せしむる本來の面目を現はし本地の風光を示すの地だ。こゝ全身獨露の玄域保羅は玆に『我儕全き者の中に智慧を語る。是れ此の世の智慧にあらず……我儕の語る所は秘密たりし神の奧義の智慧也』と云ふ。然り神の奧義の智慧だ。これ禪機の煥發にあらずして何ぞ。これ眞に『目未だ見ず耳未だ聞かず人の心未だ念はざる』永遠の眞理に就て語れる所のものである。此の眞理の當體は『神其の靈を以て之を我儕に顯はす』ことによりてのみ悟り得べきもの、これ神智靈覺である。此の境に

辿らんには唯々默識默契の一閃光あるのみ。若しそれ人此の靈能に觸れんか『靈は萬事を究ね知り神の深き事をも究ね知る也』。之を禪者の開示悟入の一境に見る。達觀の勇者の前には一切は洞然として明白だ。こゝ物々全眞頭々玄極の一等地。靈照遺すことなく玄微盡くさゞるなしと云ふべきだ。保羅の所謂『靈のことは靈によりて辨ふべし』と云ふ感應相關の宗教的眞理は『柳は暗く花は明かなり十萬戸。門を敲けば處々人の應ふるあり』と云ふ出身の一路となりて不盡乾坤の月と照り無邊風月の花と薫じてゐる。保羅の宗教的眞理の絶頂に上りて獨往獨來の天地に參ず。何等禪者の高風ぞ。これ實に列祖の大機。換骨の靈光にして至聖の命脈の依りて以て存する所。人一たび此の聖地に立たんか、宗教的實驗の光風を體して靈々相呼應する所のものがなくてはならない。保羅の禪機は此の一點に至りて極まれりと謂ふべきだ。



## 7 轉身の一境

保羅の宗教意識の根底は基督の復活に在つたやうだ。大丈夫的保羅が未だ信仰の秘鑰を握らざりし以前、即ち彼が未だサウロたりし時代に『猶ほも兇言と殺氣を吐きて主の弟子等をせめ祭司の長に往きてダマスコの諸會堂に寄する書を求め此の道に從へる者を見ば男女に拘はらず捕へて之をユルサレムに曳かんと意ひ』彼往きてダマスコの門外に近づける時、忽ち天より一靈光の閃めくありて彼を環照したる刹那彼は一大驚異の情に打たれて大地に仆れた。此時彼は一種靈妙の聲を聞いた。此の一刹那よりして肉のサウロたる彼は死して靈の保羅たる彼は復活した。これ彼の生涯に於ける心機一轉の妙動であつた。彼の意識は玆に全く靈界に向つて開け、復活の基督は彼の全精神を全く支配した。保羅の此の靈的實驗は彼をして宗教的意識の根底に閃めく微妙なる消息に觸れしめた，即ち『唯だ耶蘇基督の默示に由りて』

『我が母の胎を出でし時より我を簡びおき恩寵をもて我を召し給ひし神』の靈能に感じて內部生命の源泉を復活の基督に於て認めた。此の意識は彼の信仰生活と共に愈々深く愈々新らしくなり、更に其內容を豐富にし來つて『日々に死ぬる』生活の中に日々に復活する靈的生命の脈搏に觸るゝに至つた。『既に爾曹基督と共に甦りたれば天に在る者を求むべし』と云ひ『我儕が外なる人は壞るゝとも內なる人は日々に新なり』と云ふ。此等の宗敎的信念は復活の信念を內部的精神的靈的に味ひ來りし實證の聲と云ふべきだ。これ禪者の大死一番底の消息ではないか。これ即ち謂ふ所の轉身自在の境ではないか。これ即ち投子和尙の『氣息を絕し命根を斷じ去りて……百駭潰散して皮肉あとを留めざる所』のものではないか。禪者は此境に於て『明暗に屬せず、男女にあらざる一物』を觀る。これ即ち宇宙本體の獨露現前の風光ではあるまいか。手を懸崖に撒して絕後に復活し來る非思量の本地を蹈み來るにあらずんば、所謂大悟徹底の境界には至ることが能きない。これ使徒保羅が其の宗敎的



實驗の奧底に於て味ひ來りし絕妙の證見ではあるまいか。

## 8　體得の風懷

保羅は既に基督の復活を信じ自己靈性內部の復活を實驗した。此の實驗は彼をして更に死を脚下に蹈まへて超死的信念の一角に立たしめた。

これ彼の宗敎的信念よりして當然來るべき靈的經路だ。先きには自己內部の生活に於ける暗黑と光明との戰に疲れて苦悶煩悶の極『あゝ我難める人なる哉』と絕叫せし保羅が今や宗敎的實驗の深みに入りて『死よ爾の刺は安くにあるや陰府よ爾の勝は安くに在るや』との凱歌を歌ふて死の一關を透過して、彼方永遠の靈界より洋々として響き來る神の音樂に溶け入りて悠々自適の三昧境に逍遙遊するに至つた。何等高調の宗敎的詩韻の一境ぞ。思ふに凡そ一切の宗敎的偉人の達し得たる境地は所詮詩の匂ひ豐かなる天地に向て自己體得の風懷を行るの點にある。信が單なる信

として存する間は未だ眞の信ではない。宗教的天才の達し得たる一境は奇しくも信と詩と兩々相溶け相流れて、玆に信のうちに詩を味ひ詩のうちに信の光に接す。ここにして始めて一切自縛の境を超越して高く天地の幽懷に遊ぶを得べきだ。『神を見たるもの遂に死せず』と云ふ聖者の自覺は斯くの如くにして味ふを得べきだ。『死よ汝の名は向上なり』との詩人テニスンの高逸超脱の信念は斯くの如くにして味ふを得べきだ。これ禪的達觀の地に入りし聖者が常に此の信と詩との調和せる靈覺を自得して生死の一境を超脱するを得る所以だ。道元が『生死の中に佛あれば生死なし但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし、是の時初めて生死を離るる分あり』と説き來りて『此の生死は即ち佛の御いのちなり』と風吟したる所實にも味ひ深き信念上の靈韻と云ふべきである。無學祖元が天兵境を壓し寺衆竄匿するに際し師は一榻に兀然として軍士、刄を以て頸に加ふるも神色少しも變せず爲めに偈を作りて『乾坤孤筇を卓するに地無し、喜び得たり人空法も



亦空なることを、珍重す大元三尺の劍。電光影裏に春風を斬る』と頌せられたるが如き如何に生死の上に超然たりしかを示すに足る所の高懷の襟度なりと謂ふべきだ。唯それ保羅の超死的信念は復活の意識より來り、無學の超死的信念は人空法空の宗教的體得より來りしと云ふべきか、而かも其の態度の從容自若たるに於ては共に一だ。されど保羅の超死的意識は死を足下に蹈まへて『死』を壓伏し去れるの一事に於て勝つてゐる。無學は寧ろ死の上に超然として『死』を笑へるの慨に於て見るべきものがある。

## 9　新人の生活

保羅は其の宗教的實驗の高調を新人の意識に見た。『人基督に在る時は新に造られたる者也。舊きは去りて皆新しくなるなり』と云ひ『二つの者を己に聯ね之を一の新しき人に造りて和がしめ』と云ひ『我儕は神の造り給へる者なり即ち我儕をして

善き事を行はしめん爲めに基督耶蘇のうちに造り給へり』と云ふ。此の新人の意識は保羅の宗教的經驗に一新光彩を添へ此の經驗に立て彼は基督に於ける靈性を發揮せる新人として地上に於て神の福音を宣傳せしのみならず、一切の人類は基督のうちに此の新人の經驗を得ざるべからずと信じた。又其の可能性を認識しこれを發揮するを以て彼の一大使命也と觀じたのである。

此の新人の意識は基督教の根本精神にして基督の地上に於ける靈的行動も保羅の苦戰奮鬪も要するに此の一意識を人性の奥底に於て闡明せんが爲めであつた。禪者の生活に於て其の得道の本地に達せしものは凡て此の新人の意識を體得して立つた者に過ぎない。彼の坐禪三昧に入りて一切の執着を捨て『言を尋ね語を逐ふの解行を休し回光返照の退歩を學して諸緣を放捨し萬事を休息して善惡を思はず是非を管せず心意識の運轉を停め念想觀の測量を止めて作佛をも圖らず兀々として坐定して箇の不思量底を思量する』所以のものは一切を否定して暗黑なる死の一線を通じて



『身心自然に脱落し來りて本來の面目を現前する』永遠の肯定に入らんがためである。約言すれば之れ即ち永遠の死の否定より永遠の生の肯定に直入するの一境。これ即ち安樂の法門にして正法自ら現前し昏散先づ撲落するの超凡越聖の證契ではあるまいか。これ謂ふ所の新人の境界にあらずして何ぞ。この直指端的の一道はこれ久遠の基督の靈動せる一閃光にあらずして何ぞ。吾人は此の禪的新人の風光を保羅に於て見ると共に之を幾多古來の聖者哲人の面影のうちに觀じて、そこに人格の風趣として表現したる宗教的眞理の輝きを認めて古聖と肝膽相照らし相共鳴する所のものがなくてはならない。

## 10 『是』の人格化

保羅の禪機の發露する所行いて可ならざるなしだ。實にやこれ露堂々の聖地。彼曰く、『眞實の神、我儕が爾曹に向ひて曰へる言に是と言ひ又非と言ひしことなしと

證し給へり。……爾曹の中に傳へたる神の子耶蘇基督は是と言ひまた非と言ふが如き事なし彼には唯是と言ふことあるのみ。凡て神の約束は彼の中に是となり又彼の中にアーメンとなりて我儕に由て神の榮の顯はるるに及ぶ』と。此の保羅の一切唯是觀は保羅の禪的思想を最もよく詮表したるものと謂ふべきだ。由來宗教上の徹底せる信念より見來れば一切は信念の前には『是』であり『アーメン』である。基督は此の『是』の化身である。『アーメン』の顯現である。凡て物其の純粹の至極に達すれば其のものやがてこれ宇宙的是の一啓示として輝く。基督は此の宇宙的是宇宙的アーメンの人間として現はれたるもの。久遠の基督は久遠の是だ久遠のアーメンだ。宗教とは此の久遠的是の人格として表れたるもの、此久遠的アーメンの有限的形體のうちに響きしもの。古禪者が『無邊ノ風月眼中ノ眼。不盡ノ乾坤燈外ノ燈。柳ハ暗ク花ハ明ナリ十萬戸。敲レバ門ヲ處々有リ人ノ應ヲ』と歌へる所のもの又『一段ノ眞風見ルヤ也ヲ麽シヤ。綿々トノ化母理ニ機梭ヲ。織リ成ス古錦含ニ春象ヲ。無下奈ニ東君ノ漏泄スルヲ何トモ上』と頌したる



所のものも此宇宙的是の風光を嘆美したるものに過ぎない。こゝこれ神秘にして神聖なる宇宙文學の光焔朗々として輝く所のものではないか。此の靈火一たび人間心靈の奥扉に其のインスピレーションを傳ふるや、茲に人間心靈の聖の聖なる所に此の宇宙的是は花咲いて宗教的感應の最も奥妙なるアーメンとなりて響く。此の人心の聖の聖なる所にのみ眞正の意味に於ける自由がある。基督が『眞理は爾曹に自由を與ふべし』とは此の完全なる靈感の境を指して云ふのだ。靈感のない所に自由はない。禪者が越宗越格の正眼を具して東湧西沒、逆順縱横、與奪自在にして『手に委せて拈じ來るに不是あることなし』と云ふ放行の一面は正しくも此の機微に觸れたる所のものと云ふべきだ。向上の一句轉じ來れば蠢動含靈。一々大光明を放つて一々壁立萬仞なるものがある。

若しそれ此の『不是あることなし』と云ふ靈機を色讀して向上の一路千聖不傳の一境を掌握せん乎。人天の命脈悉く指呼を受け、等閑の一句一言、群を驚かし衆を

動かすものあるだらう。一舉手一投足、鎖を打ち枷を敲き、至る所花叢々錦簇々たる靈波の光波に浴すべきだ。こゝ佛眼も窺ひ難く慮外も測ることなきの所。正にこれ天下人の舌頭を坐斷する端的の一道。

## 11　最勝の靈能

『光に命じて暗より照り出でしめたる神』は我儕をして『耶蘇基督の面にある神の榮光』を知るの光明を顯はさしめん爲めに我儕の心を照らし給へりと云ふ神秘にして而かも深奥なる宗教的光耀の實驗が保羅の心靈に鼓動し來つた。此の基督の面上に於ける神の榮光を見るの宗教的靈眼は彼が意識の底ひを流れて基督に對する無限の憧憬をこゝに語り、其の神的榮光に觸れて恍惚の境に遊び人格の靈窓を通じて輝き來れる神の光明に醉ふて『我儕此の寶玉を瓦器に藏せり、此の最勝絶妙の靈能は我より出るにあらず、神の靈能なることの顯はれん爲めなり』と絶叫せしむるに



至つた。彼一たび此の靈能に感じては『我儕四方より患難を受くれども窮せず詮かた盡くれども望みを失なはず。迫害せらるれども棄てられず、顚倒さるれども亡びず。……憂ふるに似たれども常に喜び貧しきに似たれども多くの人を富まし何も有せざるに似たれども凡てのものを有せり』と云ふ豐富なる內部生命の充實せる實驗を語らしむるに至つた。一切の宗教的到達點は此の實驗を外にしては得べきではない。これ永嘉大師が其の『證道歌』に於て『窮釋子口に貧と稱す。實に是れ身貧にして道貧ならず。貧なれば則ち身常に縷褐を被す。道あれば則ち心に無價の珍を藏む無價の珍は用ふれども盡くることなし。物を利し緣に應じて終に怯まず』と歌ひたる所のものであつて、之れ即ち獨り涅槃の幽林に優遊して調古り神淸き、達者の洞觀したる高風ではないか。保羅の此の一切包有觀は彼が超脫的襟度のうちに閃めきし神の恩寵によりて此に達し得たるもの。彼の意識は玆に無一物の自覺に達し、此の自覺は彼をして「凡てのもの」を持てりとの絶大の信念に彼を導いた。これ「法

身覺了すれば無一物」との聖覺と相似たものではないか。「摩尼珠人不レ識ラ。如來藏裡ニ親タシク收得ス」。吾等は如來の無盡藏裡に宇宙と人生との富の深き源泉を見出すべきだ。こゝ「神に富める」者の自覺境だ。神に就て富めるものにあらずんば眞正の意味に於て富を有するものではない。保羅の富は靈界の無盡藏に接觸したるの富だ。一切を超脱して一切の内部に無限の生命の輝きつゝあるに驚きこゝに道の永刼の光に逢着してあゝ「我何も有たずして一切のものを有てり」と道破するに至つた。これ禪者が得道し來りて了々として見るに一物もなしと云ふ「凡て」ではないか。

## 12 感應道交

「常に喜び常に感謝し常に祈る」と云ふ不斷の靈感は保羅をして彼が信仰生活の生命たらしめた。此感應道交の眞理はこれ又禪者の道の窮極として說く所のもの。彼等は「大用現前軌則を存せず」と云ひ「十方を坐斷して壁立千仞なるべし」と云



ふ。これ道の絶對相を不可稱不可言の消極的一面に高調するが如き觀なきにあらずと雖も、而かも靜かに退いて其の實參實究する所のものを見るに、其の實際の方面に於ては此の大宇宙の靈と相感應し、祖師の人格のうちに輝きし眞理の光明に觸れてそこに宗敎上の最も趣味ある光耀を體したものゝ如くだ。換言すれば禪の宗敎は人格を超越したる人格敎、感應を超越したる感應的宗敎なりと云ふべきである。

『赤肉團上に一無位の眞人あり。常に汝等諸人の面門より出入す證據のものは看よ看よ』と臨濟が拈提する。時に僧あり出て問ふ。『如何なるか是れ無位の眞人』。師禪牀を下りて把住して曰く『道へ道へ』と。此の看よ看よと云ひ道へ道へと云ふものこれ即ち學人の心靈に響きし感應相關の禪機を啓發せんが爲めの警策である。此の關一つを透過して啐啄同時の大歡喜に入り、箇の穩密の田地を得來るとき、諸天花を捧ぐるに路なく、外道も潛かに窺ふに門がない。こゝ即ち『終日行じて未だ嘗て行せず終日說いて未だ嘗て說かざる』禪機の神用にして殺活自在の利劍は靈界の秘

密を破るに足るべきだ。

保羅の禪機、觀じ來れば更に猶幾多の天機妙用を語ることが能きやう。されど吾人は以上に於て其の綱要を盡し得たりと信ずる。



# 第八章　道元の宗敎

## 1　序說

道元の宗敎觀の深邃にして奥妙なる、其の人格の高雅にして超脫せる、古今東西の宗敎者中稀に見る所の聖者である。吾人は今玆に我が道元の宗敎的信念の流れに汲み來りて其の幽玄なる靈光を發揮し以て彼が宗敎意識の核心に觸れて見やうと思ふ。

吾人はこゝに其の傑作『正法眼藏』に現はれたる道元の宗敎觀を見る所あらんとするに際して、吾人の態度を明にせねばならない。吾人は謂ふ所の研究即ち理知一面の冷靜なる批評的態度に立て、敎理的或は論理的の抽象的概念論を試みんとするものではない。吾人の試みんと欲する所のものはむねとして吾人が思慕し憧憬し來

れる彼の人格に對して滿腔の渴仰を披瀝し以て彼が宗教意識の奥扉を開き、そこより流れ來る靈光無限の恩波に浴して聖者に對する吾人の衷情を吐露し、以て讃仰の敬意を表現せんと欲するものに過ぎない。

面山和尙曾て『正法眼藏述贊』を著し、其の序に於て說いて曰く『此ノ正法眼藏……只箇ノ一套卷分ニ一百ニ而浩浩焉タリ、然而逐卷別題、其題含ニ藏シテ一卷之大意ヲ而深固幽遠、無ニ人能到一、直要機機要也、與下佛ノ說キニ金剛般若ヲ、令ム以テ題目ヲ受持セシ上趣キ同ク矣余從ニ弱齡一發願妙研既經ニ半百年一、雖レ未ニ悉彈ニ底蘊一而亦似下少知ニ鼎味一者上』と云ふ。面山にして此の道元の『正法眼藏』に思を潛め、弱齡より發願覃研すること既に半百年を經て、猶ほ未だ悉く其の底蘊を彈さずと謂ふではないか。其の幽遠奥妙なること以て知るべきだ。實にこれ佛々の要機にして、祖々の機要なりと云はねばならない。これ誠に涅槃妙心の玄旨だ。其の一章一句一字一點と雖も之を見る者よりして見れば其の價値大千界よりも重しと云ふべきだ。予や何等の宿緣ぞ、一たび



此の書を得て專念讀誦すること玆に正に二十又餘年。之を讀むこと久ふして愈々其の深きに驚き、之を拜すること久ふして愈々其の高きに驚く。例へば大海に入る樣なもの、一歩は一止より深く、例へば大空を仰ぐ如うなもの一望は一望よりも高い吾人豈敢て之を讀み得たりと云はう。且つ讀み且つ味ふ。愈々讀んで愈々妙に、愈々味ふて愈々盡きず。嗚呼此の『正法眼藏』の一套。正にこれ人間心靈上に於ける『生命の聖典』である。哲人エマーソン曾てプラトーンを論じて『あらゆる書籍中プラトーンの書のみ、「あらゆる書庫を燒くべし。書庫の價値は集つて此の一卷にあり」と言へる「コーラン」に對するオーマーの狂妄なる贊辭を受くる價値あり』と云つた。此のエマーソンのプラトーンに對する嘆美の聲は、移して以て我が道元の『正法眼藏』の贊辭となすに足る。其の思想の幽玄なる其の信念の純高なる、其の文字の森嚴にして其の文體の獨闘なる、思ふに古今宗教文學中の最大傑作の一たるを失はない。吾人は今此の聖典を通ふして靈動し活躍せる我が道元の宗教意識の脈搏に

觸れて、以て吾人心靈上の要求に向て無限の渴仰を癒やさうとするのだ。

## 2 修證一如

道元は『正法眼藏』中の「辨道話」の開卷劈頭第一に於て「諸佛如來ともに妙法を單傳して阿耨菩提を證するに、最上無爲の妙術あり。これたゞほとけ佛に授けてよこしまなることなきは、即ち自受用三昧その標準なり。」と垂示し給ふた。觀じ來れば此の一句既に甚深微妙の玄味を語るものではないか。然り宇宙の妙法を單傳すると云ふ。これ實に不可說の一境だ。此の一境に立て阿耨菩提の妙覺を體得して最上無爲の妙術を體現し來りし我が道元は、宗敎的實驗の心證に上りて、自受用三昧の王座に入り、一切の萬法を自個心證の上に透見し給ふた。あゝこれ眞の透見。實にも妙へなるは宗敎的意識の光耀に觸れて、此の透見の一境を靈覺したる光景にもある哉。こゝ一切は靈照の境だ。光明遍照の境だ。此の自受用三昧に遊化して眞理の如



實相を直觀せんには、正しくも「端坐參禪」を其正門とせねばならぬ。道元は此の端坐參禪の奧旨を闡明せんが爲めに別に『普勸坐禪儀』及び『學道用心集』の高著がある。而かも道元一代の著作詮じ來れば此の端坐參禪の實驗錄たるに過ぎない。否彼の一擧手一投足。一切の行動。一切の思想。一切の信念。彼に在りては悉くこれ此の端座參禪よりして發し來れる一閃光であつた。渾心渾靈。道元の凡てはこれ即ち禪そのものであつた。是に於てか道元其の人は即ち禪の化身也と謂ふべきだ。

道元は端坐參禪の正門に入つて佛祖の大機を掌握し、人天の命脈を把捉した。而かも此の妙法は單に獨り道元の獨占すべき所のものではなくして一切の衆生悉く妙法の所有者でなくてはならない。これ道元が「此の法は人々の分上にゆたかにそなはれりといへども修せざるにはあらず。證せざるには得ることなし。放てば手にみてり一多のきはならんや。かたればくちにみつ。縱横きはまりなし」と道破し給へる所以である。實に此の法たるや天地六合に遍在し一切の萬有に內在する所のもの

だ。これ古人が「之を開けば六合に彌り之を卷けば密にかくる」と云ふ所のものではないか。人生に内在せる此の神聖にして微妙なる本具のデヴィニチィも未だ修せざるには現はれず證せざるには得ることなき所のものだ。此の本具内在の神性を發揮するこれ即ち宗教の本領ではないか。而かも此の修や此の證や本來二にして一だ修は證の因にして證は修の果と云ふべき所のものではない。これ道元が「それ修證はひとつにあらずとおもへる即ち外道の見なり」と示して「佛法には修證これ一等なり。いまも證上の修なる故に初心の辨道即ち本證の全體なり。かるが故に修行の用心をさづくるにも、修の外に證をまつおもひなかれとをしふ。直指の本證なるが故なるべし。既に修の證なれば證にきはなく、證の修なれば修にはじめなし」と教へ給ふた所以だ。茲に修證は不二にして本來一如だ。修證不二。證修一如。嗚呼此の一境は宗教的實驗の最も深き境にして坐禪辨道の極致である。修外に證を要め證外に修を要むるが如きは未だ以て宗教的眞理の妙諦に接觸し得ざる所のものであ



る。宗教上の實驗境に於ては要求即感應の本地に入りて其風光を味ふべきである。「こゝを以て釋迦如來、迦葉尊者ともに證上の修に受用せられ、達磨大師、大鑑高祖同じく證上の修に引轉せられる。」それ宗教上の眞理の當體は一超直入玲瓏無碍の三昧境に參じて始めて體得し得らるべきの境だ。こゝ即ち「一分の妙修を單傳せる」辨道の境地にして、此の初心の辨道は「一分の本證を無爲の地に得る」所のものである。此の「本證を無爲の地に得る」と云ふ所に宗教上の純粹無雜なる本地の風光恰も花と薫し光と照るところのものありて存するではないか。我が道元禪師は坐端參禪の正座に在りて端なくも此の本證を無爲の一境に看破して「妙修を放下すれば本證手の中にみてり、本證を出身すれば妙修通身におこなはる」と云ふ甚深微妙の實驗に立ち給ふた。嗚呼何等絶妙の洞觀の一境ぞ。道元の宗教意識はこゝに其の高調に上りて洞然として明白なる法界の大光景を彼が心證上に透見したるものと謂ふべきだ。あはれ奇すしきは此の無爲の一境に立て宇宙法界靈妙の眞相を如實に味ひ

來れる我が道元の人格の高風にもある哉。

## 3　一如の行道

道元の宗教意識は直覺の一路を辿りて既に端坐參禪の正門に入り自受用三昧の境界に游戯した。此の正門は宗教的奥扉を開いて其の聖殿に到るの直路だ。こゝ實に尊主獨坐の境だ。宗教上の直指單傳の妙術は端坐參禪の外に其の正門を見出すことが能きない。道元は今や此の天曉不露の境地に立て宣じて曰く「今をしふる功夫辨道は證上に萬法をあらしめ、出路に一如を行ずるなり」と。嗚呼何等の甚深なる宗教的洞觀體得の一境ぞ。こゝに人々證上具有の萬法は出路行持の一如だ。こゝ一切の萬有は個の心證上に融會し去りて法々塵々渾一妙化の靈趣を帶び來る。而かも一切の道德一切の慣習一切の囚へられたる謂ふ所の眞理のコンヴェンショナリズムを超脱して、露堂々として絶對の境に出路し來りて而かも玆に一如を行ずる底の大風



光を顯揚してゐる。何等の達觀ぞ何等の超絶ぞ。これ實に本光の所謂「法々絶待にして海印放光し山色突兀たり」と云ふ所のものにあらずして何だらう。更に道元は「其の超關脱落の時此の節目に拘はらんや」と云ふ。然り宗教上の實參の境界は一切の羈絆を脱却して出入自在無碍自由の地に立て一如體玄の妙味を觀ずる所にある。人一たび轉身の境に入りて這箇透關底の眼を放ち來らば東湧西沒逆順縱横の禪機を把持して殺人刀活人劍手に委かせて天下人の舌頭を座斷し得べきだ。こゝ透脱灑落の一境だ。大用現前軌則を存せずと云ふべきではないか。豈其の節目に拘はるべけんやだ。證上の出路。一如萬法の妙は之を表現するに文字を絶し論議を空じてゐる。こゝたゞ夫れ直觀默契すべきの一諦あるのみだ。

無上の佛法を正傳して「正法救生を懷ひとなし」たる我道元は「名利にかゝはらず道念を先とし」て、到る所山川を訪らひ「まのあたり大宗國にして禪林の風規を見聞し、智識の玄旨を稟持せしを記し集めて參學閑道の人に貽し」給ふた。道元の

禪に對する深き研鑽體得と其の使命の自覺とは此の一節に於ても讀み得べきではないか。道元の宗教意識は道元の人格を形成し、道元の人格はやがて彼の使命を生み出した。意識と人格と使命との三者は彼に於て渾然として一の大なる生命のうちに溶けて露妙なる光明となり輝きつゝあるのだ。吾人は更に進んで彼が宗教意識の光耀を見て見やう。

## 4 身心脱落

「宗門の正傳に曰く此の單傳正直の佛法は最上のなかに最上なり。參見知識のはじめより更に燒香、禮拜、念佛、修懺、看經をもちひず、ただし打坐して身心脱落することを得よ」と。然り道元の宗教意識の究竟の本地は此の身心脱落底の一句に在る。言を尋ね語を逐ふの解行を休し、回光返照の退歩を學し來りて出身の活路を求めたるも此の身心脱落の一境に參じて本來の面目を現前せんが爲めである。道元



の要せし宗教的眞理の妙諦は此の一句子に至りて極まつてゐる。諸緣を放捨し萬事を休息して善惡を思はず是非を管せずして、心意識の運轉を停め念想觀の測量を止め作佛をも圖ること莫ふして「箇の不思量底」を思量せし所以のものは、唯此の身心脱落の「非思量底」の一句を體驗せんが爲めであつた。道元の宗教的生命の消長は懸りて此の一句を透脱すると否とにありて存じた。若しそれ一と度此の一境を透脱せん乎。龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似て居る。正法自ら現前して昏散先づ撲落するに至るのだ。しかも此の一句の體得色讀は燒香、禮拜、念佛、修懺、看經等のそれ等一切のものを用ひずして直往直來端坐參禪の正門よりして一飛躍に入るにある。詮ずる所宗教的神祕幽玄の奥龕を開いて其の內部生命の源泉に掬まんものは智識や理解や禮讃や此等一切のものを超越せねばならない。此等一切は單に宗教的生命の外濠を廻走する輕車に過ぎない。此等の一切は此の久遠神秘の生命の大潮音の鞏鞳たるものに比し來ればさながら大實在の淺瀨に騷ぐ小波のそれにも似て居

る。神秘の神砦は實にや稀有妙法の境だ。此の神秘の神砦に肉薄せんずる底の英靈漢は須く靈的直覺の一大飛躍に參じて峯上の峯に攀ぢて燈外の燈を觀せねばならない。これ我道元が奇しくも此の一境に參じて「遍法界みな佛印となり盡虛空悉く悟りとなる」と道破せし所以である。道元の此の宗敎上の實驗は彼をして「本地の法樂を增し、覺道の莊嚴を新にせしむ」るの力を感せしめた。

然り「佛法を住持せし諸祖並に諸佛ともに自受用三昧に端坐依行するを其の開悟の正しき道とせり。」我道元も謂ふ所の此の正しき道を辿つたに過ぎない。而かも彼が三業に佛印を標し三昧に端坐したる一刹那彼の心證上に閃きし得道の妙果は彼をして「十方法界三途六道の群類皆共に一時に身心明淨にして大解脫地を證し、本來面目現ずるとき諸法皆正覺を證會し、萬物共に佛身を使用して速に證會の邊際を一超して覺樹王に端坐し、一時に無等等の大法輪を轉じ究竟無爲の深般若を開演す」るの大光景を面のあたり直觀するを得せしめた。嗚呼何等の驚くべく稀有絕妙の宗



敎的實驗ぞ。今や道元の意識には大宇宙の森羅萬象は一々活躍靈動しつゝあるではないか。こゝ大宇宙は一箇の禪的道場と化して居る。一塵一石一木一草一切は無等々の大法輪を轉じて眞理の妙諦を宣傳しつゝある。道元の汎神的宗敎觀は今や無韻の宇宙詩となりて其の妙香を薰じつゝある。大なる宗敎觀が大なる藝術として流れつゝある。吾人はこゝに宗敎的天才としての道元を高しとすると同時に亦詩人としての道元の深を見るべきではないか。由來詩人と宗敎家とは同じく宇宙を家とする實在の一枝に連れる同胞である。詩の深き處は宗敎に入り宗敎の妙なる處は詩となつて現はる。道元の如きは宗敎の奧旨を體して彼の言ふ處知らず識らず詩語燦として花咲くに至つたのではないか。

## 5　生死即生命

道元の宇宙的脫塵觀は更に進みて「是等の等正覺更に還へりて親しく相冥資する

道通ふが故に斯の坐禪人確爾として身心脱落し從來雜穢の知見思量を截斷して、天眞の佛法を證會し、普ねく微塵際そこばくの諸佛如來の道場毎に佛事を助發し、廣く佛向上の機に被らしめて能く佛向上の法を激揚す」と云ふ。宇宙と自我とは脉々相感應し靈通交孚の一味の幽路は彼と我とをして親しく相冥資する道通ふと云ふ物心同感の融會力に結びつけしめた。こゝに宗教上の妙味は彼呼べば我答へ我呼べば彼應ふると云ふ甚深の一線によりて味ふべきではないか。あゝこれ面前の一絲永遠の彼方に展開するものにあらずして何ぞや。吾人は玆に此の面前の一絲を辿りて時空を超越したる聲前の一句を聽くべきではないか。こゝに宇宙は『有限』なる水平線上の一路を彼方の『無限』に沒し『無限』は其の絶對の姿を『有限』のうちに彩りつゝあるではないか。『死』の一線を透して『生』の久遠界に通じ、久遠の『生』はやがて『死』てふ絶妙の姿のうちに花咲きつゝあるではないか、呼吸しつゝあるではないか。宗教とは此の有限に即しての無限を觀じ、無限裡に有限の姿を味ひ來つ



て、生死一如の正覺を體得する所に在る。此の覺道に入りて「生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなき」境界に達して「生死の中に佛あれば生死なし」と云ふ悟了の本地に立つて人をして「生死即ち佛の御生命なり」と云ふ脱落の風光を觀ぜしむるはこれ豈我が道元の禪機ではないか。こゝに謂ふ所の身心脱落の境だ。天眞の佛法を證會したるの地だ。こゝにして始めて諸佛如來の道場毎に佛事を助發し、佛向上の機に被らしめて能く佛向上の法を激揚し得べきではないか。あはれ此の時、然り「この時十方法界の土地艸木。牆壁瓦礫皆佛事をなすを以て其の起す所の風水の利益に與る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟りを顯はす。此の水火を受用する類、皆本證の佛化を周旋する故に是れ等の類と共住して同語する者亦悉く相互に無窮の佛德具はり、展轉廣作して無盡無間斷不可思議不可稱量の佛法を遍法界の内外に流通するものなり」。宗教上の活源頭に立て人境互遍して蹤跡沒き此の靈々玄々の實相境に逍遙遊する者にして這箇無

邊の風月を觀じ不盡の乾坤を仰ぐべきのみ。然りこゝ唯あはれ〳〵と宇宙實在の大觀を嘆美するの外途なき所だ。「無限の憧憬我を執へて一種の靜寂にして森嚴なる靈の國に飛ばしむ」と詩聖ゲエテの歌ひしも此の境ではないか。「ただ驚異のみ我をして美しき驚異の國に携ふ」と詩人シルレルの歌ひしも亦此の境ではないか。聖者道元の洞觀せし法界の大風光は正しくも詩聖のインスピレーションによりて徹見せし所のものと眞に其の調を同うするものと云ふべきだ。

## 6　本來の面目

宗教的眞理の心證は必ずや靈覺の自證に上り來らねばならない。ナザレの神人基督が「我は途也眞也生也」と體得して宗教的自覺の一境に高擧せらるゝや「我と神とは一也。我を見し者は神を見し也」との神人一如の靈覺の自證に入り給ふたは此の消息を語るものではないか。此の見證三昧の境に實參して眞理の靈趣を觀じ來れ



ば全法界は久遠劫來の奥妙なる實在の相と現じて、一切は妙法の光と照り、眞如の月と輝くものがある。道元の宗教意識は自受用三昧の境界を透過して、靜中の直證に立ち「一塵を動かさず一相を破らず」して天地幽玄の内秘に入り、全宇宙悉く「廣大の佛事甚深微妙の佛化をなす」を見たり。汎神思想によれる此の宇宙の神格化的のアイデヤは彼をして「此の化道の及ぶ所の草木土地ともに大光明を放ち深妙法を說くこと窮る時無し」と云ふ靈光無碍の圓滿境に立たしめた。

道元の宇宙的解脫の宗教觀は一切の有情一切の非情同時に成道して在火焰裡一一一大法輪を轉じて、窮まり盡くることなき大光景を觀見して「草木牆壁は凡聖含靈の爲めに宣揚し凡聖含靈は還つて草木牆壁の爲めに演暢す」と云ふ。諸の衆鳥は皆是れ阿彌陀佛の法音を宣流すると說きし淨土門の他力思想に現はれたる極樂觀は今玆には現實其のまゝの世界にして之を見ることを得るではないか。一色一香中道にあらざることなし、と云ふ天臺の哲學的の宗教觀は有情非情皆俱成佛との日蓮の血

あり涙ある宗教觀となりて「有情は生の成佛非情は死の成佛」と宣じ來りて一切の草木成佛を說き「法界は釋迦如來の御身にあらずと云ふ事なし」と云ふ全法界遍在の釋尊を高調して如來秘密の妙法を宣揚するに至つた。今此の天臺より脫化し來れる日蓮の成佛觀と道元の成道觀とを見來るに俱に詩的表現を以て汎神的思想を宗教的に言表せし所のものなりと雖も日蓮のそれは客觀的に之を見た傾向が强く從て有情非情を差別的に見た觀がある。道元のそれは寧ろ主觀的に之を觀じた內部生命の聲なりと云はねばならない。否此所には旣に主觀客觀は一如平等の妙致に入つて互に相妙交妙涉して圓轉無盡の一路を辿りつゝあるものゝ如うだ。これ道元が「自覺覺他の境界本より證相を具へて闕けたることなく、證則行はれて懈たることなからしむ』と唱道して覺行圓滿の佛德を嘆美したる所以である。

然り道元の宗教的見地は主客一如の靈境を辿りて修證不二の本地に達し、一多の際限を超越して縱橫無窮の透脫境に入つた。これ皆端坐參禪の實驗的正門を透過し



て體得し給へる所のものである。此の三昧の兀兀地を證し來りて我が道元は「是を以て僅に一人一時の坐禪なりと雖も諸法と相冥し諸時と圓かに通ずるが故に無盡法界の中に去來現に常恒の佛化道事をなすなり彼此共に一等の同修也。同證也」と云ふ不斷の法燈を揭げて妙聲綿々たる風光を露呈し來る。其の遼かに斷常の境界を超えて同修同證の面目を提げ來り、不染汚三昧の本分を發揮する所正に大解脫底の全人格の風姿を偲ばしむ。一切の時空を超じて然かも之と相感應し相抱擁して禪機の大法輪を轉ずる所、人をして永遠より永遠に渡りて饗き渡る靈界の大潮音の幽かに流れ來る靜けき調べに耳を傾けしむ。あはれ慕はしき神秘の光景にもある哉。「百頭皆本面目に本修行を具へて測り量るべきにあらず、知るべし假使十方無量恒河沙數の諸佛共に力を勵まして佛智慧を以て、一人坐禪の功德を測り知り究はめんと云ふとも敢て邊りを得ることあらじ」と云ふ無上贊嘆の聲を聞くに至るも所以なきにあらずと云ふべきだ。

## 7　本他の風光

斯くの如きは我が道元の宗教觀に現はれたる彼が坐禪に對する僞らざる讃美の聲である。頌榮の詩てある。更に進んで道元は多門の佛教中什麼を以てか偏へに坐禪を勸むるやとの疑問に對して、彼は禪に對する一隻眼を開いて之に向て好箇の解決を與へられた。

然り佛法に多門ありと雖も自受用三昧の正門は入佛法の端門にして而かも此の自受用三昧たる禪の宗教觀は一切佛教の總府也と謂はねばならぬ。何を以てか獨り之を正門となす。道元示して曰く「大師釋尊正しく得道の妙術を正傳し又三世の如來共に坐禪より得道せり。是の故に正門なることを傳へたる也。加之西天東地の諸祖皆坐禪より得道せる也。故に今正門を人天に示す」と。あゝこれ佛祖同道の行路ではないか。



坐禪の玄旨を了せざる驕慢の者流は坐禪の精神を誤りて「但虛しく坐して爲す所なからん何に因りてか悟りを得る便りとならん」寧ろ「讀經念佛は自ら悟りの因緣とありぬべし」と云ふ。既に坐禪に對して虛しく坐して爲す所なしと云ふ。是れ未だ坐禪の何たるを知らざる小機鈍根のともがらにして宗教的開眼の一境に參じ得ざる所のものと云はねばならぬ。我が道元は斯くの如き者流に向て一大痛棒を與へられた。曰く、「汝今諸佛の三昧無上の大法を虛しく坐して爲す所なしと謂はん之を大乘を謗ずる人とす。惑ひの最深き大海の中に居ながら水なしと謂はんが如し、既に辱く諸佛自受用三昧に安坐せり。これ廣大の功德をなすにあらずや。哀むべし眼未だ開けず心猶ほ醉ひにあることを」と。さなり宗教上の開眼の一境に參じ得ざる底のものに取りては宗教的神秘の光景は聾者の音樂に於けるが如く盲者の色彩に於けるやうだ。一切は彼等に對しては無音だ無色だ。漆桶不會だ。黑暗々だ。靈光雨と降る法界の大觀は彼等の前には一切閉鎖せられつゝあるのだ。これ道元が宗教上の

實驗の內秘を闡明して「大凡諸佛の境界は不可思議也。心識の及ぶべきにあらず。況んや不信劣智の知ることを得るや。唯正信の大機のみ能く入ることを得也。不信の人はたとひ誨ゆとも受くべきこと難し」と垂示せし所以だ。正信の大機のみ能く入ることを得る一種未踏の新天地は唯それ端坐參禪の窄き一門よりして仰ぎ見ることを得べき靈界の新光景ではないか。こゝ神秘だ幽玄だ超靈境だ直證地だ。釋尊の靈山會上に於ける拈華の一境は即ち此の默照の一境ではないか。靈よりして靈に響く靈の實證ではないか。かの空しく舌を動かし聲を揚ぐるを佛事功德とおもへる輩の如きは正に道元の前に愧死すべきである。彼等は譬へば井田の蛙子の如し舌頭三昧を以て宗敎の能事畢れりとなす。あゝ宗敎のこと豈然かく容易に說き易からんやだ。げにや宗敎の實參底には無限の含蓄があり內容があり妙趣がある。吾人は舌頭三昧の宗敎家に與みせずして寧ろ其の昔靈山會上の拈華の風光に禪機の一閃光に觸れたる聖者の姿を偲ぶのだ。



## 8 轉大法輪

夫れ宗敎上の體得の妙致は之を擬すれば轉た遠く之を動ずれば愈々遙かだ。唯直下に無心にして默契すべきのみ。一切の法を說くは一切の心を除かんが爲めだ。我に一切の心無くんば何ぞ一切の法を用ふるの要があらう。眞理の本源に立て本來淸淨佛の眞相を觀じ來れば更に一物の著くべきものが無いではないか。永嘉古佛歌ふて曰く「君見ずや絕學無爲の閑道人。妄想を除かず眞を求めず。無明の實性即佛性幻化の空身即法身。法身覺了すれば無一物本源自性天眞佛」と。赤裸々灑洒々たる禪者の高風は此の眞理を渾身に身讀して大圓覺の至境に立てるものではないか。かの黃卷赤軸幾百の經書幾千の聖典も悉くこれ「頓漸修行の儀則」を明知して圓覺の心證を取らしめんとの瓦石に過ぎないのだ。言ふ迄もなくこれ「徒らに思量念度を費して菩提を得る功德に擬せんとにはあらぬ」のである。若しそれ「千萬誦の口業

を頻にして佛道に到らんとするは猶ほ是れ轅を北にして越に向はんとするが如しだ。」其の宗教的信念の極致と相離ることと千萬里も管ならざるものがある。禪の的旨は「契心證念の學人」にして「得道明心の宗匠」に從ひ嫡々正傳して始めて稟持せらるべきのみである。

道元は更に其の深邃にして純一無雜の信念を開いて當時の佛教中大乘的究竟の地位を有せし法華宗、華嚴教並に眞言宗の宗教觀と禪のそれとを對比し來りて禪の禪たる本來の家風を發揚せし所正に彼の宗教的見地の徹底せる一面を見るに足る。曰く「知るべし。佛家には教の殊劣を對論することなく、法の淺深を擇ばず、但し修行の眞僞を知るべし。草華山水に引かれて佛道に流入することありき。土石沙礫を握りて佛印を稟持することあり。況んや廣大の文字は萬象に餘りて猶ほ豐か也。轉大法輪亦一塵に攝まれり。然らば即ち即心即佛の言猶ほ是れ水中の月也。即坐成佛の旨更に亦鏡裡の影也言の巧みに拘はるべからず」と。嗚呼何等の達見、何等の徹底



ぞ。此の達見と此の徹底とを有して斷然として當時の宗教界に一新旗幟を鮮明にして立てる哲人的宗教家たる道元の聖姿何ぞそれ慕はしきの極みではないか。

## 9　單傳の妙道

理觀的の宗教より更に超脱して宗教的實驗の如是相に宗教上の眞諦を認めたる道元は宗教的眞理の意識直接の經驗を以て心證獲得の證權となしたるや言ふまでもない。これ彼が「直證菩提の修行」を進め更に「佛祖單傳の妙道を示して眞實の道人ならしめん」ことを庶幾せしを以て見るも明かなる所である。由來宗教家の宗教家たる所以の本分は宇宙實在の妙旨を體得して一切の人類に向て其の本來の面目を發揚し人格其のものゝうちに宗教的眞理の光明を光被せしむる底の「眞實の道人」たらねばならない。現代の所謂滔々たる宗教者流は徒に口舌の人にして眞實得道の士を見る事甚だ稀だ。若しそれ道元をして之を見せしめば彼の胸中其の感慨果して如何

ぞや。洞門の流を汲む宗教家たるもの深く高祖の大精神に參ずる所ありて正に須らく奮起踴躍して靈界の健鬪場裡に立つべきではないか。

道元の宗教的眞理の奥妙なる一諦に悟入して、其の妙趣を發揮し來るや、超世の風骨を飜して佛法學道の大見地を垂示し給ふた。曰く「佛法を傳授することは必ず證契の人を其の宗師とすべし文字をかぞうる學者をもて其の導師とするに足らず」と。嗚呼これ當時の宗教家に對しての一大痛棒であつた許りでなく今猶ほ吾人の上に閃き來る一大痛棒ではあるまいか。昔使徒保羅も叫んで曰く「智者安くにある學者安くにある、此の世の論者安くに在る。神は此の世の智慧をして愚ならしむるに非ずや」と。基督は其の深祕幽玄なる宗教的意識の高調に達して靈界の大光景を面のあたり目睹して歌ふて曰く「天地の主なる父よ此事（宗教的眞理の極致）を智者達者に隱して赤子に顯現し給ふを謝す。父よ然り斯くの如きは聖旨に適へる也」と。あはれ此の境一切を超越して純信圓醇の聖域に達したるものと云ふべきだ。こゝ一



切は無限の風光裏に游泳しつゝあるのだ。靈界の園囿に逍遙游したる人の子の心靈は露滴る天恩の光波に浴して雲冉々、水漫々、明月蘆花俱に本來の面目を語りつゝあるではないか。宗教的證契の本地は正に斯くの如きものたるべきだ。哲學者の議論を脚下に踏まへ、科學者の論證を掌中に握りて自家見性の證權に依つて立つ。これ豈宗教界に於ける聖者哲人の一超飛躍の新天地ではないか、新光景ではないか。若しそれ然らずして文字に執着し教義に拘泥し傳說や慣習に囚へられて更に百尺竿頭一歩を進むること能はずんば、譬へば一盲の衆盲を引く樣なもの。相俱に溝中に顚倒して其の深底に落在するに終るや必定だ。是を以て神祕の雲に包まれたる宗教的眞理の當體に逢着せんずる底の參玄の高流は、宗教的眞理の內容を自家人格の色彩裡に色讀したる神人聖者の悟得底に接觸して彼我厖々相感應同交する神秘的新啓示の中に宗教的眞理の妙趣を直覺すべきだ。これ我が道元が「今此の佛祖正傳の門下には皆得道證契の哲匠を敬ひて佛法を住持せしむ。かるが故に冥陽の神道も來り

歸依し、證果の羅漢も來り問法するにおのおの心地を開明する手を授けずと云ふことなし。餘門に未だ聞かざる所也」と道破したる所以のものだ。

## 10 格外の逍遙

道元は宗教的眞理の色彩を得道證契の哲匠の人格の內容中に之を見た。然り宗教的眞理は抽象的なる概念論の空疎なるそれと異にして、眞理其のもゝ血肉化したる渾然たる人格の風趣中に於て之を味ふべきだ。基督がピラトの法廷に立てピラトの「眞理とは何ぞや」との詰問に對して「深き沈默」を以て之に應へたりしにも拘らず彼が嘗て其の門弟と別るゝに臨み彼等に對して宗教上の奧祕を闡明し垂示して曰く「我は即ち眞理也」と(Ich bin die Wahrheit)自我其のものを眞理自身也と體得したる所に無限の妙味と無邊の風趣との匂ふ所のものがあるではないか。道元亦此の人格に彩られたる眞理の姿を提示して曰く「知るべし我曹は素より無上菩提缺けたるにあらず永へに受用すと雖も承當することを得ざる故にみだりに知見を起すことをならひとして之を物と思ふによりて大道徒らに蹉過す。此の知見によりて空華まち〳〵也。……此の知見をならふて佛法佛行の正道と思ふべからず。而かあるを今は正しく佛印に依りて萬事を放下し一向に坐禪するとき迷悟情量の邊りを超えて凡聖の路に拘はらず速かに格外に逍遙し大菩提を受用するなり。かの文字の筌蹄に拘はる者の肩を比ぶるに及ばんや」と。即心是佛有佛無佛の境界を飛躍して直ちに眞理其のものの灑々裸々の天眞に入る所。人格其のもの頓て宗教其のものと謂はねばならぬ。玆に至りては華嚴の十地法華化城の說、一切の小乘大乘のドグマも一片の故紙と化し去るべきではないか。藏通別圓理は高遠玄妙なりと雖も人格的眞理の前には紅爐上一點の雪と消え去るべきではないか。由來禪の宗教觀は宗教的眞理の達觀を理知教義の方面に見ずして其の如實の端的の靈味を實驗的方面に於て心證し人格的直覺のうちに神秘的感應を以て宇宙の大精神に觸れて「浩然一片無二稜縫一」と云

ふ洞徹の一境に立たしむるものである。此の境地に於て道元の如きは其の人格即宇宙精神の權化と云ふべきだ。

## 11 相傳の嫡意

道元の禪觀は愈々入りて愈々深く、愈々出でて愈々妙だ。謂ふ所の禪はかの「六度及び三學の禪定に倣つて云ふべきにあらず。」これ即ち「佛法相傳の嫡意なり。」それ宗教的眞理の色彩は意識より意識に流れ、心靈より直ちに心靈に語る所のものである。人格者の至深の聲は人格者の外之を識るものがない。古の神人が「父の外に子を識る者なし」と道破したる所以の消息は此の端的の妙致を闡明したる所のものと謂ふべきだ。道元は此の宗教的一味の靈光に觸れて三學中の定學、六度中の禪定と本來の禪の禪たる所以の本旨を簡別して玆に禪は「佛法相傳の嫡意なり」と謂ふ。正に知るべし道元の宗教は學僧一輩の理觀的にして煩鎖なる概念論的の抽象的



なる空文字の論義にあらずして體究色讀したる自己意識內の人格の光明となりて現はれ出でたる活如來の活文字なるを。「如來往昔靈山會上にして正法眼藏涅槃妙心無上の大法を將て唯り迦葉尊付法せし」と云ふ此の以心傳心の境界は謂ふ所の拈華微笑の境界にして宗教的眞理の至深の妙趣を此の一諦のうちに說き盡したるものと云ふべきである。沈默より沈默に響きし此の聲なきの一句は古今東西の心靈史上に於ける聖者の胸に落ち來りし感應道交の最も高き雷聲ではないか。此の釋尊一拈の一境は天衆長へに之を護持し來りて我が道元も釋尊の意識に奏でられし此の同じ靈界の音譜に諧調を合して歌ひつゝある。「佛法の全道」は此の一句に體せられたる者と謂ふべきだ。

## 12 安樂の法門

語中に默を味ひ默中に語を味ひ來りて語默動靜體安然たる信念の本地に立て一超

飛躍の如來地に參じたる道元は古佛の相續修行して證入せし「窮知し難き」の道に入りて禪の「安樂之法門」なることを直證せられた。これ道元が其の『普勸坐禪儀』に於て「謂はゆる坐禪は習禪にはあらず、唯是れ安樂の法門なり。菩提を究盡するの修證なり。公案現成羅籠到ることなし。若し此の意を得ば龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似たり」と云ふ所のものである。正法自ら現前する此の妙機に接觸して超凡越聖の境界を直覺したるものにして始めて禪の妙味を識るべきである。斯道の風光は諸佛諸祖の心證したる所にして單に坐臥の拘束する所とならない。而かも坐臥共に其の本地の靈致を發揮すべき所のものである。

「痴人の前に夢を說かず山子の手には舟棹を與へ難し。」宗敎上の消息は實驗の境に參じたるものを外にしては到底其の醍醐の味を味ふことが能きない。道元の實參したる境界は恐らく道元自身の外に之を識るものがないのだ。「本證の全體」に證入し修證不二の靈覺を把持して「妙修を放下すれば即ち本證手の中に滿てり。本證を



出身すれば則ち妙修通身に行はる」と云ふ宗敎上の至高體驗に就きては吾人の既に說いた所。此の修證非兩段の眞趣を獲得して佛法中の「眞實」の一境に立たんことを欣ばんずるものは「初心後心を擇ばず凡人聖人を論せず佛祖の敎により宗匠の道を逐ふて坐禪辨道すべき也。」それ然りかるが故に「道を見る者は道を修す」と云ふではないか「得道の中に修行すべし」と云ふのもこれがためではないか。道元の宗敎道は愈々深くして愈々其の奥妙を窺ひ知り難きものがある。

## 13 身心一如

更に進んで道元の宗敎觀は身心一如觀に入つた。道元先づ一問を設定して曰く「或は曰く生死を嘆くこと勿れ。生死を出離するには最と遏かなる道あり、謂はゆる心性の常住なる理を知るなり。其の旨たらく此の身體は已に生あれば必ず滅に遷され行くことありとも此の心性は肯へて滅することなし。能く生滅に遷されぬ心性我が

身に在ることを知りぬればこれを本來の性とするが故に、身は是れ假の體なり死此生彼定り無し。心はこれ常住也。去來現在變る可からず。是の如く知れるを生死を離れたりと謂ふ也。此の旨を知るものは從來の生死永く斷へて此の身終る時性海に入る。性海に朝宗するとき諸佛如來の如く妙德方に具はる。今は縱ひ知ると雖も前世の妄業になされたる身體なるが故に諸聖と等しからず。未だ此の旨を知らざる者は久く生死に廻るべし。然かあれば則ち唯だ急ぎて心性の常住なる旨を了知すべし。徒らに閑坐して一生を過さん。何の待つ所かあらん。是の如く道ふ旨。是れ實に諸佛諸祖の道に稱へりや奈何」と。

嗚呼これ最深の一大疑問だ。古今東西の宗教史上に於ける靈魂不滅なる思想上の一大問題だ。道元は此の死後に於ける心性常住觀に對しては絶對の否定的態度に立つた。「今謂ふ所の見全く佛法に非ず。先尼外道の見也」と破し去つて更に此の先尼外道の思想を說明した。「謂く彼の外道の見は我が身の內に一つの靈知あり。彼



の知即ち緣に遇ふ所に能く好惡を辨へ是非を辨ふ。痛痒を知り苦樂を知る。皆彼の靈知の力也。然かあるに彼の靈性は此の身滅する時脫けて彼所に生る。故に此に滅すと見ゆれども彼所の生あれば永く滅せずして常住なりといふ也」と。此の見に對して道元は「此の見を倣ふて佛法とせん(は)瓦礫を握りて金寶と謂はんよりも猶ほ愚なり」と痛罵し「癡迷恥づべき喩るに物なし」とて痛切なる嘆聲を漏らされた。由來「心常相滅の邪見を計して諸佛の妙法に等しめ、生死の本因を起して死生を離れたりと謂もはん」は佛法の本旨に反し禪の極致に背く所の愚にして憐むべき偏見と云はねばならぬ。道元は此の見解に向て「耳に觸るべからず」とまで極論した。然りと雖も兒を憐み醜を忘るゝの慈眼愛腸は彼をして「事已むことを得ず」して其の奧妙なる信念の玄旨を披瀝せしめた。吾人は今此の古今の最も深き宗教上の一大問題に就きて直に道元の語る所を聞かう。曰く「知るべし佛法には固より身心一如にして性相不二なりと談ずる西天東地同じく知れる處敢て疑ふべからず況んや常住

を談ずる門には萬法皆常住也。身と心を分つことなし。寂滅を論ずる門には諸法皆寂滅也。性と相とを別くことなし。然かあるを何ぞ身滅心常と謂はん正理に違かざらんや。加之生死は即ち涅槃なりと覺了すべし。未だ生死の外に涅槃を論ずることなし。況んや心は身を離れて常住なりと領解するを以て生死を離れたる佛智に妄計すといふとも此の領解智覺の心は即ち猶ほ生滅して全く常住ならず。是れ果なきにあらずや。嘗觀すべし。身心一如の旨は佛法の常の談ずる所也。然かあるに何ぞ是の身の生滅せん時心唯り身を離れて生滅せざらん。若し一如なる時あり一如ならぬ時あらば佛說おのづから虛妄になりぬべし。又生死は除くべき法ぞとおもへるは佛法を厭ふ罪となる愼まざらんや」と。此の「生死は即ち佛の御命なり」との甚深の信念より流れ出でたる生死一如身心不二觀は道元の宗教的意識の生命の源泉と謂ふべきである。



## 14 宇宙精神

之を古聖の體究に見るも之を哲人の靈覺に徵するも此の宇宙の眞相は一大心靈の顯現と見ねばならない。一切の宗教は此大宇宙の靈系に內在する實在の核心に觸れてそこに宇宙的感情のうちに全自我と全萬有との融合に入り神秘なる生命の脈搏に接して全人格の本有の光明を發揮するを以て其の極致とせねばならない。換言すれば宗教とは人間の心靈が絕大にして神秘なる此の宇宙の心靈と交通感應する精神的意識の生活狀態を謂ふのだ。謂ふ所の宇宙の心靈は全宇宙に自己を顯現し且つ其の全體を形成する所の如何なる極微中に於ても「現在する神秘」の力として潑溂たる生の力として自己を啓示する所の者だ。神的內在の觀念は人をして「一塵を知れる者は盡界を知り一法に通ずる者は萬法に通ず」と云ふ相即無二の意識に立たしむ。廓落たる一大法界の光景は浩渺として纖雲をとゞめず。一波一浪盡く是れ意識海中

の現象ではないか。無限の煙波神秘の幕を開いて靈光團々花と散り水と流るゝ所のものがなくてはならない。あゝこれ夢の如き幻の如き詩の世界にして而かも同時に事實よりも更に深き活きたる事實の世界である。こゝにして事實は眞の意味に於ける「實際」だ「眞」だ。眞なるが故に直に「善」だ。善なるが故に直ちにこれ「美」だ。眞善美の一切を抱擁して然かも內容無限に豐富なる宇宙の大生命は其の儘即ちこれ『一心』ではないか。要するに人格的唯心的宇宙觀は一切の宗教的眞理の歸する所ではないか。有神論の理知の推究によりて概念の階梯を昇り來りて此の絕頂に辿らんとするは哲學的研究の一路たるを失はずと雖も更に又直覺的意識の直接經驗によりて內在的汎神論の色彩を辿りて直下に此の境に參ずるも亦其の向上の一路たるは之を古聖者の實驗に照らして疑なき所である。吾が道元の如きは思ふに其の後者に屬する者と謂ふべきだ。「佛法に心性大總相の法門と云ふは一大法界をこめて性相を分かず生滅を謂ふことなし。菩提涅槃に及ぶまで心性に非らざるなし。一切諸



法萬象森羅ともに唯是れ一心にしてこめずかねざることなし。此のもろ〳〵の法門皆平等一心也」と云ふ。此の道元の思想は馬鳴の『大乘起信論』の所謂「心眞如即是れ一法界大總相法門體」と云ふ一大思想より脫化し來れる所のものなることは明かである。然もこれ單なる思想系統の思索にあらずして實究體得したる眞理分上の消息たるに至りては道元自身の意識中に於て如是一貫の眞理を獨創したるものと云つても可い。玆に謂ふ所の「心眞如」とは現代的哲學語を以て之を譯すれば「絕對精神」若しくは「世界精神」と云ふ所のもの。即ち一切を支持し統一し總括し含藏し葆有する所の宇宙生命だ。實在其のものだ。全宇宙の本體だ。森羅萬象悉く此の心眞如の顯現ならざるものはない。動的方面の一切と靜的方面の一切とは打成して此の實在のうちに渾融して一如體玄の妙相を織り成す所のものだ。故に生滅の動的方面より見來れば存在の法界悉皆生滅的現象界である。不生滅の靜的方面より觀じ來れば一塵一法盡くこれ永劫の實相である。道元は此の見地に立て「此の一法に身

と心とを分別し生死と涅槃とをわくことあらんや」と云ふ。これ即ち道元が「生死」の章に於て「生死の中に佛あれば生死なし……たゞ生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし。是の時初めて生死を離るゝ分あり」と高調したる所のものである。道元の身心脱落觀はこゝにも其の光芒を顯はすと云ふべきだ。獨逸現代の哲學者ルードルフ・オイケン氏其の大著「大思想家の人生觀」中に於て哲人スピノザを論じて曰く『スピノザの事業の中心を爲す所のものは世界と人間との關係也。其の一括せる叙述は主として彼の大著「エチーカ」に於て與へられたり。此の叙述は數學的證明法の冷靜なる形式を取り然して其の内容は刺戟と活動とに充滿せり。恰も極めて莊嚴なる戲曲の如くこゝには人間の運命は凡て眼前に開展せらる』と。冷靜なる數學的形式に囚へられたるかの如く見ゆる所のスピノザ哲學の内容に於て其の奥底に靜かにして而かも强く流るゝ一種の生命の脈搏に觸れたる此のオイケンのスピノザに對する批評は直ちに移して以て吾が道元の宗教觀の



それに對比するも亦妙ではないか。道元の事業の中心をなす所のものは身心脱落觀の宗教的體得なりと云はねばならぬ。而かも其の一貫せる大潮流は主として彼の大著『正法眼藏』に於て與へられたる所のものである。彼の論述や極めて冷靜其の論理や極めて精緻なりと雖も而かも其の思想信念の内容に流れつゝある潑溂たる生命の大精神は大宇宙的戲曲の諧調を奏して詩美滾々として汲めども盡きざる所のものがある。神に醉ひたる哲人スピノザの汎神的詩想は更に深く道元の宗教意識に流れ込みて彼と此と同調異曲のシンフォニーを奏しつゝあるではないか、道元は宇宙的詩人と云ふべきだ。

## 15　超自他境

それ禪は戒を離れて戒を抱擁してゐる。否一切の宗教的實驗に於ける向上の一路を辿り來れば始めには先づ戒律を嚴守して戒律のうちに宗教の生命に觸れやうとし

たが、單なる戒律のうちには宗教的生命の活躍するもの無きを以て求法學道の高士は更に戒律以上一歩を進めて超戒律の宗教的信念の純境に向て其の歩みを刻む所のものである。一たび超戒律の境に立て宗教的莊嚴の光耀に接し來ればこゝ一段の光彩陸離たる法界の靈波に浴する所のものがあつて、古聖の芳躅中に無限法悅の心香に醉ふて、一戒一律悉くこれ性珠燦然として詩の如くに薫ずるものがなくてはならない。戒を出でゝ戒を超じ更に再び戒を抱いて立つ所のもの、これ眞の宗教家の態度ではないか。神人基督が猶太的なるモーゼの一切の戒律を超越して而かも更に宇宙の絶對的精神の中に新形式の「愛」てふ戒律を獨創し體現したる所のものは正に此邊の消息を語る所のものではないか。今道元の戒律に對する態度を見るに「持戒梵行は即ち禪門の規矩なり。佛祖の家風也。」と說破し來りて戒律嚴淨の精神を發揮せられた。惟ふに道元は日本古來の宗教家中最も戒律を嚴守せられたる者の第一人だ而かも彼の戒律に對するや戒律に囚へられずして一言一行一擧手一投足總てこれ戒



律なりしと云ふべきた。古聖の謂ふ所の「心の思ふ所矩を踰えず」とはそれ道元の體達したる境ではないか。「誠に一事を事とせざれば一智に達することなし」として眞言止觀兼修の弊を打破せられたる彼は一意專念向上の一路を辿りて內部深奥の秘密に憧れつゝ更に更に無限の道に向て進み給ふたのだ。

「佛法には即心是佛の旨を了達しぬるが如きは口に經典を誦せず身に佛道を行せざれども敢て佛法に闕けたる所なし。只だ佛法はもとより自己にありと知る、これを得道の全圓とす。此の外更に他人に向て求むべきにあらず。況んや坐禪辨道を煩はしくせんや」と云ふ自己箇中の天地に於て得道全圓の境界に立てりと誤解せるものに對して道元は其の誤謬を正し其の空語の響きなる事を指示し更に宗教的見地の正當なる判斷を下された。曰く「佛法は正に自他の見をやめて學する也」と。更に曰く「若し自己即佛と知るを以て得道とせば釋尊昔化道に煩らはじ」と。然り宗教的眞理の悟入は單なる小主觀なる個人の知識上若くは理知上の認識を以てしては決

して其の內的生命の活源頭に觸着する所のものではない。謂ふ所の宗教的眞理の把捉は宇宙の實在に向て直接經驗の自覺に立て本來の面目を披瀝し來らねばならない。非ず、經驗（erfahren）すると云はんよりは寧ろ此の實在常體を體驗（erleben）する底のものだ。獨逸語にエヤレーベンするとは「に生くる」と云ふの義である。其のもの當體「に生くる」にあらざれば眞の知識ではない、眞の悟入ではない。此の境即ち體驗の境だ。意識直接の把住だ。イリングウォース曰く「神秘とは人間の心靈が絕對的實在を直接に把捉することなり」と。此の神秘の自覺に立てる者にあらずんば宗教的眞理の妙趣は掬し得ざるのだ。これ道元の所謂「自他の見をやめ」たるの境ではないか。これ釋尊自得體究の本地ではないか。この本地に入りしものにして始めて道を身に味ふたる所のものと云ふべきだ。禪は身に道を體するの法だ。古德の古則之を證して餘りある。これ丙丁童子來求火の眞意ではないか。「如何なるかこれ學人の自己なる。」禪師云く「丙丁童子來求火」と。此の言下に則公の大悟した



る所以のものは「自己即佛の領解を以て佛法を知れりと謂ふにあらずと云ふことを明に知りたるを以て也。」

古今東西道に入りしもの或は竹聲を聞いて道を悟り、或は華色を見て心を明むるもあつた。釋尊は曉の明星を見て正覺の座に入つて證道し、阿難は刹竿の倒れしところに法を明らめた。更に一言半句の下に心地を開明したる所のもの多い。何ぞ坐禪辨道を要しやう。坐禪辨道を專ら唱道したる道元の之に對する態度果して如何。曰く「古今に見色明心し聞聲悟道せし當人共に辨道に擬議（思）量なく直下に第二人なきことを知るべし」と辯道に擬議思量なく直下に第二人なきはこは即ち端的の把住ではないか。古人謂はずや「行も亦禪坐も亦禪」と。若しそれ明眼の衲僧ならば大宇宙到所これ一個の道場なるを證破すべきではないか。宇宙の第一人者の靈覺に參じ「超人」の意識を提げて起たんか。ニイチエの說を待たずして東方古來幾多の禪者は全人の風光を顯揚して獨闢の家風を發揮してゐるではないか。

「破衣綴盂を生涯として青巖白石のほとりに茅を結んで端坐修練したる」古の聖者の衣鉢を傳へたる我が道元は一生參學の大事を究畢して正法眼藏涅槃妙心の正脉を我が日本の禪界に顯彰して宗教的眞理の深奥なる新生活を開拓し天下後昆に對し精神生活の森嚴にして醇熟、清高にして幽雅なる風趣を自己人格の完成に於て發露せられた。道元の如きは眞に大なる宗教的天才と謂ふべきである。



# 第九章　禪の本領

## 1　佛心印の單傳

何をか禪の本領と云ふ。禪の本領は佛心印を單傳する所に在る。これ釋尊が大迦葉に傳へしと云ふ所の拈華微笑の境だ。謂ふ所の『正法眼藏涅槃妙心』とは即ち是だ。本邦禪宗の鼻祖榮西禪師其の著『興禪護國論』に說いて曰く「大なる哉心。天の高きも極むべからず。心は天の上に出づ。地の厚きも測るべからず。心は地の下に出づ。日月の光も踰ゆべからず。心は日月光明の表に出づ。大千沙界も窮むべからず。心は大千沙界の外に出づ。其太虛乎。其元氣乎。心は即ち太虛を包みて元氣を孕む所のものなり。天地は我を待て覆載し、日月は我を待て運行し、四時は我を待て變化し、萬物は我を待て發生す。大なる哉心。吾已むを得ずして、强て之を名け

て之を最上乘と名く。亦第一義と名け、亦般若實相と名け、亦一眞法界と名け、亦無上菩提と名け、亦楞嚴三昧と名け、亦正法眼藏と名け、亦涅槃妙心と名く。然らば即ち三輪八藏の文、四樹五葉の旨打して併せて箇の裏に在り。大雄氏釋迦文是の心法を以て之を金色頭陀に傳へ敎外別傳と號す」と。此の敎外別傳なる佛心の奥旨を發揮し、唯だ一心を說いて唯一法を傳へ、佛を以て佛を傳ふる不可說不可取の本源清淨心を明め、端的に宇宙の眞相を直覺し、直ちに人をして心地を開明し本分に安住せしむるを以て禪の本旨となすのだ。

謂ふ所の一心とは此の心即ち是れ法界性。眞如諸識の義を判せず。修證迷悟の境に執せず。禪界に入れども而かも界を忘れ、有緣を脫し空忍を出でゝ、有無の相を消し、凡聖の途を超じ、塵纖を脫盡して我是れ我にあらざる所のものだ。人若し此の境界に入て此の境界に執せず、身心俱に脫落し、坐臥同じく遠離し來れば、是を名けて「本來の面目」を露はし「本地の風光」を現ずると謂ふのだ。瑩山が「能〻超ニ



越〻凡聖ヲ透ニ過〻迷悟ノ論量ヲ離ニ却〻生佛之邊際ヲ」と云ふ所のもの即ち是の一境を體得したる露堂々たる全身獨露の光景ではないか。

黃檗希運禪師此の境界を道破して最も深邃を極む曰く「此の法は平等にして高下あることなし。是を菩提と名く。即ち此の本源清淨の心は衆生諸物世界山河と有相にもあれ無相にもあれ徧十方界一切平等にして彼我の相なし。此の本源清淨の心常に自ら圓明にして徧く照らすも世人悟らずして只見聞覺知を認めて心と爲し、見聞覺知の覆ふ所となる。所以に精明の本體を觀ず。但直下に無心なれば本體自ら現ずること大日輪の虛空に昇り徧く十方を照して更に障碍無きが如し。……見聞覺知を空却すれば即ち心路絕して入處無し。但だ見聞覺知の處に於て本心を認む然も本心は見聞覺知に屬せず、亦見聞覺知を離れず。但だ見聞覺知の上に於て見解を起すこと莫れ。見聞覺知の上に於て念を動ずること莫れ。亦見聞覺知を離れて心を覓むること莫れ。亦見聞覺知を捨て法を取ること莫れ。即せず離せず住せず着せざれば縱

横自在にして道場にあらざることなし」と。あゝこの不即不離不住不着の態度に立て眞理の妙味を直覺す。これ禪の禪たる本領にあらずして何だ。

## 2　那箇の一物

心を以て更に心を求むべからず。若しそれ斯くの如くんば千萬劫を歴とも終に得る時なし。「如かず當下に無心ならんに、便ち是れ本法也」と觀じ來りて心即是法、法即是心の妙諦を實證して「此の靈覺の性は無始より已來虛空と壽を同うす。……方所無く內外無く數量なく形象なく音聲なし。覓むべからず求むべからず。智慧を以て識るべからず、言語を以て取るべからず、……諸佛菩薩と一切蠢動含靈と同じく此れ大涅槃の性也。性即是心。心即是佛。佛即是法」と云ふ。見證したる禪の宗敎觀は此の直覺的眞理の汎神的思想の上に立て一切の宇宙人生の諸相を解釋し此の宇宙的大觀の眞理を人生の實際的方面に活用し吾人をして見性成佛の本面目を發揮



せしむるを以て其の直下無心默契の聖諦と觀ずる所のものである。

此の禪の本旨を體得して以て宇宙に對すれば禪の對象は此の宇宙それ自身である此の無限にして絶對的活動をなしつゝある此の宇宙は玄沙禪師が「盡十方世界是一個〻明珠」と觀じて一切處是れ淸淨と見たる所のもの。禪眼よりして見來れば是れ即ち一個佛心の發露たるに外ならない。否宇宙は佛心其のものなりと謂ふべきだ。森羅萬象一切の事相はこれ此の佛心の靈光片々たるに過ぎない。是れ禪者の呼んで「這箇」或は「那個の一物」と云ふ所のものである。『碧巖錄』に曰く「宇宙空じ來るに更に誰かある」と。此の那個の一物を把住して大宇宙を空じ來り、更に此の大宇宙其のものやがて金剛不壞身たる佛陀其のものたることを洞觀し來りて、山河開て錦に似たり澗水湛へて藍の如しと云ふ歷々たる天地の風光に接して宇宙の實在に觸れ實相の妙法を觀ずる。これ豈禪者の體得すべき了々地ではないか。これ豈達道の士の微笑すべき可々地ではないか。「猿は兒を抱いて靑嶂の後に隱れ、鳥は花を含んで碧

巖の前に落す」と云ふ實相の眞風に觸れて「谿聲これ長廣舌、山色豈清淨身にあらざらんや」と觀ずるは禪者の天地自然に對する融會妙化の態度ではないか。何等の閑寂、何等の詩趣。而かも此の閑寂の一境を透して無限の大活動を開展し、此の詩趣の一境を味ふて解脱向上の一路を辿る。こゝに禪者の金風體露の風骨を見るべきである。

宇宙に對する禪者の態度は更に轉じて自我の意識に對す。由來直指人心見性成佛と云ひ本來の面目を發露すると云ふ。詮ずる所は心性の本來を徹見するにあり。こゝに直覺的意識は端的に自我の眞相に觸れ自我即佛の意識に達する。ここにキャンベルが「余の神は余の深我也」と云ふ所のものと相感應する所がある。禪者が「聲前の一句」を體得すると云ひ「父母未生已前」に相見すると云ふ所のものは要するに「自己の深我」に觸れんとする所の要求たるに過ぎない。而かも之れ求めて得べからず。直下默契とも云ふべき境に參じて、本體自現の妙相に接すべきだ。これ道元



禪師が「佛道を習ふと云ふは自己を習ふ也、自己を習ふと云ふは自己を忘るゝ也。自己を忘るゝと云ふは萬法に證せらるゝなり。萬法に證せらるゝと云ふは自己の身心及び他己の心身をして脱落せしむるなり」と云ひ其の脱落の風光を歌ふて「水清ふして地に徹す魚行いて魚に似たり。空濶うして天に透る鳥飛んで鳥の如し」と云ふ所のものを把握して起つべきである。

### 3　自己即眞理

禪に謂ふ所の「心」とは自己の自我を意味する所のものと、直ちに無限絶對の佛陀其のものを意味する所のものとの區別ありと雖も「自心是れ佛」と云ふ所の思想は禪的思想の根調にして華嚴に所謂「心と佛と衆生と是の三は差別なし」と云ふ所の汎神的思想と其の趣を一にするものと云ふべきだ。これ赤肉團上の一無位の眞人を自己の本體に觀じて自我即佛の宗教意識を高調する所のものだ。坐禪も修證も見性

も一切は此の自我即佛の意識に達せんが爲めの方法たるに過ぎない。「行も亦禪坐も亦禪。語默動靜體安然。縱ひ鋒刀に遇ふも常に坦々。假饒毒藥も亦閒々」と云ふ所のものは此の一境を體得自證して金剛不壞の信念を發揮せる脫落底の高風ではないか。永嘉大師が「三身四智體中ニ圓カナリ。八解六通心地ニ印ス」と歌ふて自個の本體より大光明を放ちたる所以のものも亦これ心身脫落の風光ではないか。

禪の本旨を宇宙に觀じ其の妙趣を自我の意識に觀じたる禪者の宗敎觀は更に此の宇宙を自我と觀じて正法眼處涅槃妙心の無限絕對の佛其のものゝ風光を自我に見たると同じく此の宇宙のうちに認め來りて、「雨竹風松皆說禪」と云ふ詩的感想により て現はれたる信念の流れとなり、更に坐禪三昧の直覺に立つては彼の道元の所謂「十方法界三途六道の群類皆俱に一時に身心明淨にして大解脫地を證し本來面目現ずるとき諸法皆な正覺を證會し萬物ともに佛身を使用して、速かに證會の邊際を一超して覺樹王に端坐し、一時に無等々の大法輪を轉じ、究竟無爲の深般若を開演す。…



此のとき十方法界の土地艸木牆壁瓦礫皆な佛事をなす」と云ふ如きは無盡間斷不可思議不可稱量の無窮の佛德を大自然遍法界の內外に流通する所のものである。此の心境ともに靜中の證入悟出を自受用して一塵を動かさず一相を破らざる甚深微妙の一大法輪を轉じ來る所これ豈禪の妙聲綿々たる所の境界ではあるまいか。

要するに禪の宗敎觀は端的に宇宙人生の眞相に悟入し默契して自己と眞理とを融合不二の一境に體得し、汎神的觀念を以て佛心印の神秘を直覺し、有無相通活殺自在の妙境に參じて、本來の面目を發揮し、之を吾人の日常生活の實際裡に應用して以て身心脫落の風光を自證せんとする所にある。之れ豈禪の本領ではないか。

天も蓋ふこと能はず、地も載することも能はず。虛空も容るゝ事能はず、日月も照す事能はず。無佛の處獨り尊と稱して始て獅子に喩れり。（碧巖錄）

# 附　錄

## 東洋意識の靈趣を憶ふ

「心なき身にもあはれは知られけり鴫たつ澤の秋の夕ぐれ」とは豈獨り西行法師の秋に對する感想のみではあるまい。其の生に活きんとして己が生の弱きに驚き、其の眞に觸れんとして其の眞の醜きにつまづき、更に高き他の生に活きんことを要めつゝある現代の思想界は「心なき身にもあはれは知られけり」と歌ひける痛切なる詩人西行の詩情に共鳴する所があるではないか。

今の思想界は其の自然人生の問題に對する解釋の餘りに現實的にして餘りに科學的なる、一切を分析し一切を機制化し去つてさらぬだに凡俗化常識化せんとする吾等の生活をして愈凡俗的常識的ならしめんとする傾向がないではない。一夜中宵靜

坐して東洋意識の靈趣を憶ふ。此の間何等かの意義なくして可ならんやだ。

現實思想に倦み疲れたる我が內部の要求は更に深奧なる理想の一境を何處にか得んとして喘ぎつゝ向上の路を辿りつゝあるではないか。これ謂ふ所の新ローマンチシズム若しくは新神秘主義の聲の時めき來りし所以ではないか。新神秘を呼ぶのは新理想を呼ぶの聲である。理想のなき所神秘はない。理想と神秘とは常に同伴同住すべき高き運命を有つてゐる。現代の思想界が舊き理想に慊らずして所謂舊道德・舊信仰・舊慣習・舊藝術等の一切を放擲し去つて神秘の一面に集中し來りし所以のものは、所謂コンヴエンショナリズムに反抗し所謂空想派の思想に欠陷を認めしが爲めなることは吾人の既に認むる所。過渡時代の時代精神として、一度は所詮通過せざるべからざる思想上の無門の一關だ。吾人は我邦の敎壇が藝術上の思想と云はず宗敎上のそれと云はず凡てが一たび此の一關を透過せざるべからざることを深く思ふものである。遭逢は頓て透過である。透過は頓て向上である。思想上の此の一關



の遭逢は吾人の前途に新光明新理想の輝きつゝあることをほのめかしつゝある一種の象徵ではあるまいか。

新理想を求むるの聲は顧みて吾人をして暫し懷古の美にあこがれしむ。懷古の美はやがて向上發展の美だからである。乞ふ吾人をして懷古の燈をかゝげて東洋意識の神秘の一境を味ふ所あらしめよ。

由來東洋意識の特質とする所は端的だ。直觀だ。超入だ。飛躍だ。一超直ちに宇宙の大聖殿に乘り入るのだ。神秘の一燈をかきたてゝ絕對の無限境裡に立つのだ。現實界より、更に高き更に美はしき更に聖き更に貴き一境を現實の彼岸に觀ずるのだ。

古人が謂ふ所の「無邊の風月」と云ひ「不盡の乾坤」と云ふもの此の常轉法輪の一大境を指して云ふのではないか。宇宙萬有の眞髓本質を直下に把捉し來りてこゝに佛祖不傳の妙心を味ひ妙法を味ふ。至聖の命脈の基く所列祖の大機の據る所と觀ずる

のだ。此の靈照の神域に入りて相を離れ體を絶して思議の及ぶ所にあらず言說の示す所にあらざる無等々の靈趣を觀照する。これが其の特色だ。

然り靈照だ。觀照だ。直觀だ。直入だ。一切の差別相を包み個別相を內在して、平等一味無碍圓融の本地に立つ。これ實に靈妙の神境である。神秘の聖殿である。此の一境は理解によりて分析すべきの境ではない。抽象的概念の世界にあらずして感銘的觀照の世界だ。研究によりて達すべきものにあらずして直觀によりて入るべきの地だ。哲學的考察の問題にあらずして、寧ろ詩的觀照の境だ。既に詩だ從て情的だ。直觀的だ。脫落的だ。超倫理的だ。超現實的だ。出世間的だ。之を西洋意識の個人的・倫理的・利己的・機制的・現實的なるに比して正に其の正反對の好コントラストだ。西洋意識は何處迄も個人的だ從て知的にして而も意志的だ。倫理的人格的思想の確立する所以だ。之に反して東洋意識の特質とする所は物の屬性を超越して直ちに其の本質眞髓に入るの結果として超倫理的だ超人格的だ無我的だ。



本來個人思想と無我思想とは思想界の二大潮流にして古來東西の哲人聖者等は共に其の何れかの大流に棹して其の源泉に辿りしものにあらざるはない。然りこれ實に本來東洋意識と西洋意識との分るゝ分水嶺にして一は人格的思想に立ち一は超人格的思想に入つた所以だ。古來東洋意識の粹として歌はれたる禪的一味の宗教思想の如きは此の東洋意識の超人格性を最もよく發揮したるものと云ふべきか。吾人は左に少しく禪的趣味によりて其の靈趣を語つて見やう。

『金剛經』に曰く「菩薩は應さに一切の相を離れて阿耨多羅三貌三菩提心を發すべし」と。又曰く「應さに所住なき心を生ずべし」と。又曰く「一切諸相は即ち是れ相に非ず」と。更に又曰く「如來は諸心は皆な非心たり是を名けて心となすと說き給ふ、……過去心も不可得也現在心も不可得也未來心も不可得也」と。斯くの如きは一切の相を離れて自然萬有を觀じ人心を觀じ、更に「若くは色を以て我を見、音聲を以て我を求めば是の人邪道を行ふ、如來を見ること能はず」と說き來りて宗

教上の對象たる如來を觀照するに一切無相の觀を以てした。而して古佛者の世界觀は「一切有爲の法は夢と幻と泡と影との如く露の如く又電の如し、應さに如是の觀を爲すべし」との一句に歸すべきではないか。斯の如き絶對の一境に本地の風光を味ひ「鳥飛んで鳥の如く魚行いて魚に似たる」(道元)萬有如々の詩情に觸れ、青山綠水到る所本來の面目と相見する。「心は虛空界に同じ、虛空界を悟り得る時、是も非も法もなく是れ實に貴く覺へ候着衣喫飯行住坐臥此中を離れず」と大燈國師の道破せし所亦これ此の端的の味ひではないか。古人の「我が心秋月に似たり」と頌するもの亦此の靈妙の幽趣を語るものではないか。本來の面目と云ひ本地の風光と云ふ玄々如々の一境は語る能はず說くべからずと雖も所詮は絶對界に直入したる端的の妙趣ではないか。此の境實に靈と靈相道交するの天地だ。唯佛與佛の境界だ。理性のナイフの切斷すべからざる超人格的の靈地だ。而かも此の境、水は水にして山は山なり。森羅萬象露堂々として吾人の面前に歷然としてゐる。一木一草本地の風



光を語つて盡くる所がない。現實に即した理想境だ。現象界に即しての神秘境だ。此所に神秘は單に神秘として存するにあらずして一切は神の靈光を帶びたる神秘として存在するのだ。之を人格的意識を以て語らん乎。此所人格の內部に超人格の靈光は微笑しつゝ有限界に無限の妙香を薰じつゝあるのではないか。個性に即しての無我の一境は玆に花咲きつゝあるにあらざるか。吾人を以て之を見れば大なる深き意味に於ての個人性の發揮はこれ頓て高き意味に於ての超個性の顯現である。個性と超個性とは其の深き意識の根本に於ては相反すべきものにあらずして相抱擁すべきの妙諦を有するものなることを感ずる。大なる自力は即ち大なる他力だ。人間の內部生命を外にして神の力があらうか。神の力を外にして人間の生命があらうか。東洋意識の特質は一切を破し去つて一切を得る所にある。差別界を捨てゝ平等界に立ち更に再び差別界に歸る所にある。此の意味に於て他力本願の妙旨も味ひ深きものがある。パウロが「最早我れ生けるにあらず基督我に在りて生くる也」との心證

は差別我を捨てゝ平等我に生きし境界を道破したるものではないか。玆に「第一の我」は既に死し「第二の我」に復活したるものではないか。換言すれば第一の我は差別我個我にして第二の我は平等我神我だ。「最早我れ生くるにあらず」と云ふ前半句は彼の無我觀にあらずして何ぞ。「基督我に在りて生くる也」とは彼の大我觀にあらずして何ぞ。大我の內容は無我にして無我の形式は大我だ。吾人は此の一句に基督敎的脫落觀の高調を見る。由來基督敎の西歐に入りてより此の本來の超脫的意識は泰西特有の個性意識によりて溶化せられて不知不識の間に其の本來の東洋的性質を薄らぎ個性發展の思想に順應しつゝ來つたものゝ樣だ。新プラトーン若しくは中世紀の神秘思想殊に獨逸のエックハルト若しくはヤコブ・ベーメ及びタウラー等の神秘思想の中には東洋的無我的直觀的宗敎觀の脈派と相通ずる所のものがある。敬虔にして而かも純眞なる直觀神秘の一面に重きを置きしと雖も十九世紀の科學的物質的思想の蹂躪する所となり、文藝と云はず道德と云はず宗敎と云はず其の影響を



被りて科學的藝術、散文的文明、功利的宗敎のみ時代の迎ふる所となりしが、今や思想信念界の第二曙光は東洋意識の復活として吾人の前に提供せられつゝあるではないか。東西兩文明の融合。一神敎と汎神敎との接觸。個人意識と無我思想との論戰時代は益々思想上の發展に一新光明を齎らし來らんとしてゐる。此の時に當り東洋意識の趣味を憶ふ亦所以なしとせないのである。

## 白隱の「夜船閑話」

佛蘭西の人道敎の開祖オーギュスト・コントは、彼の思想の最後の轉化に於て「腦髓の衛生法」を實行した。謂ふ所の「腦髓の衛生活」とは、全然一切の讀書を廢し、其の勞作に專心一意集中して其の思想生活の一轉機を劃したことを謂ふのである。白隱の「夜船閑話」に表はれた生活法を見ると、此のコントの思想生活法とは異つては居るが、其の內面生活に於て一味相通ずるものがあるやうにも思はれる「夜船閑

話」は所謂「閑話」であるやうで其の内容が事實か否かは知るに由なし。事實と見るには餘りに詩的情味に富んで居る。單に一篇の小説として見るには餘りに事件の發展と其の内容の單調なのに物足らなさを感ずる。よしそれが事實であつても小説であつてもどちらにしても、私の「夜船閑話」に對する評價には何等の影響も受けない。「山野初め參學の日、誓つて勇猛の修心を憤發し、不退の道情を激發し、精練刻苦する事既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す」と云ふ白隱の修養の緊張ぶりが躍如として活きて居る。白隱の禪は此の緊張さの中に其の芽を出して居る。初めから眞摯の態度なくんば宗教生活に入る資格がない。白隱の禪が愈々入りて愈深く其の透徹の幽味を發揮したのも此の態度が產んだ產物である。

此の出發點に立つて宗教生活の第一歩に蹈み入つた白隱は、一夜忽然の落節に止らず「從前多少の疑惑根に和して氷融し、曠劫生死の業報、底に徹して溫滅し」たるにも管せず、更に進んで禪生活の眞に觸れようと努力した結果「動靜の二境全く調



和せざる」矛盾生活の巢窟に陷つた。宗教生活に脚を踏み込むものゝ必ず一度は通過せねばならぬ此の暗路に踏み迷ふた白隱は「猛く精彩を著け重ねて一回捨命し去らん」の大勇猛心を振り起して前進したのであつたが、とう〳〵期月ならざるに「心火」逆上し「肺金」焦枯して、睡眠も食事も全く廢せなければならぬやうな境に立ち至つた。此の時彼は白河の山裏に巖居せる白幽先生を訪ねて「内觀の要秘」を聞き、養生の秘訣を了し、生の本源に掬み、道の奥妙を悟り「營衞充ち心神健かなる」一境を體得し、「自己即ち是れ天地に先だつて生せず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なる事」を覺得せられたのである。

現代語を以て之を批判すれば「夜船閑話」の思想内容は、肉に對する靈の關係、靈に對する肉の關係を相即不離の中に體驗して、其の感得自在の妙を自己直接經驗の中に味つたものと云ふべきであらう。現代哲學に於て新たに問題として提供された此の靈肉相關の眞理は、最も古き問題にして又た最も新らしき問題の一つである。

世に所謂靜座法の問題の如きも、其の通俗的衛生法の一方法として人間生活に何等かの新らしい意味を齎らすのみならず、實驗體得の上より感ずれば衛生法より入つて一歩足を宗教の天地に踏み入れて居ると見ることも出來やう。少くとも斯くの如き見地に立つて衛生的方面より見たる肉の問題が、其の儘にやがて宗教的の靈の問題と道交感應するものがなくてはならぬだらう、由來何が肉で何が靈か。一元か二元か。此の問題は古來の哲學上の所謂唯物論や唯心論と云ふような、片よつた議論で片のつくものではなからうと思ふ。肉と靈の間には血の通て居る謂はば音樂的のリズムが互に脈打つて居るではないか。ベルグソンが傑作「物質と記憶」の中に此の消息を解決せんとして、未だ其の奥義に達し得ないやうな感がある。現代思想が新らしく「肉」の靈味に目覺めて來たのは驚くべき傾向である。私は斯うした新時代の新しい思想のテンデンシイが、何か此の新しいヴェルを透して其の奥に秘められた「美しい驚」を見出さずには置かないだらうと思ふ。此の意味に於て、白隱の「夜船



閑話」を新らしい眼を以て讀んでくると、其處に何だか新しい宗教や新らしい哲學の芽がかくされて居るではないかと思はれる。勿論「夜船閑話」は白隱の著作のうちでは左程たいしたものではない。私は彼の「遠羅天釜」のなかには、更に深い彼の體得底が現はれて居るのを見る。

兎に角「夜船閑話」の一小冊子の中に、宗教的生活が肉からして靈へ、靈の活きた力によつて肉の復活を見る微妙なる消息が鮮かに現はされて居るのを見るときに、私は白隱が此の一小冊子を彼の想像の詩として書いたとしても、それが內面生活より見れば、詩其ものが直ちに生活の眞實だと云つてよからうと思ふ。「詩は史實より更に眞なり」と云ふ內面的生命の消息は、斯うした人間生活の內側を流れて居る光の流れによつて最もよく見ることが出來るのである。

私は現代我邦の思想界が、肉に偏したものは肉許りに生き、靈に偏したものは靈許りに生きやうとして居る今日、靈肉共濟の一大事を自己生活の中に體現して立つ

た白隱の宗教生活の一端を、此の「夜船閑話」の中に見ることを得たのを喜ぶのである。

本を了ずれば心を識る。心を識れば佛を見る。是れ心是れ佛是れ心なり。念念佛心。佛心佛を念ず。早く成ぜんことを得んと欲せば、心を戒めて自律せよ。淨律淨心なれば。心即ち是れ佛なり。(心王銘)

## 行乞生活

私は此の頃行乞がして見たくなつた。桃水和尚の跡を踏んで見たくなつた。フランシスの流れを汲んで見たくなつた。眞の宗教生活が行乞生活の中に見出されるのではなからうかと思ふやうになつて來た。オスカー・ワイルドが「社會主義の下に於ける人間の靈魂」の中に「基督は社會を改造しやうとは試みなかつた。從つて彼の教へた個人主義は苦痛と孤獨とに依つてのみ實現され得るものであつた。彼は驚異すべき靈魂を持つた乞食である。彼は神聖な魂を持つた癩病患者である。財産と健



康とは彼に必要がない。彼は苦痛を通して自己の完成を實現する神である」と說いて居る。私から云はせると彼は乞食生活をしたから一切の財産と一切の健康とを持つことが出來たのだと思ふ。眞の宗教者の態度は一切無の自由境に於て一切有の體驗に入るのである。指月が「如來及び一切の賢聖遞代ともに異趣なく行じ來る法あり曰く行乞なり」と云つて居る。行乞の生活が一切無の體驗境に直入した生活でなくては如來及び一切の賢聖が何れの時代に於ても行じ來る法と云ふ譯には行かない。此の境地に入ればこそ「座ながらにして人天の供養を享くる」に堪へるのである。私共の日常生活が財産に執着し健康に心配し一歩も其の埒外に超脫することが出來ないからこそ眞の意味に於て何一つ所有することも出來ないし眞の健康を保持することも出來ないのである。昔、基督の許に巨萬の富を持つた青年がやつて來て宗教的生命を體驗せんが爲めには何を爲すべきかと質問した。此の青年は國家の法律を破つたことは勿論宗教的戒律を破つたこともない普通道德の實行者、善良なる

市民であつた。彼は全く普通人として尊敬に價する良民であつた。然るに基督はこれに對して「汝若し全からんと思はゞ往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ。さらば財寶を天に得ん。且つ來りて我に從へ」と答へた。ワイルドが此の基督の精神を現代語に譯して曰く、

「あなたは私有財產をお捨てなさい。それはあなたの完全を實現することからあなたを妨げます。あなたの邪魔物です。荷物です。あなたの人生はそれを必要としません。あなたが本當に如何なる人であるか又本當に何を要求してゐるかと云ふことのわかるは、あなたの外にではなく、あなたの內に於てゞす」

このワイルドの解釋は人間生命の內部完成は財產と云ふ邪魔物や重荷によりて妨げられるから是等一切の執着を抛擲し去つて赤裸々の境地に入つて「人其者」の本來の光明を發揮せよ云ふのである。「外物などに何の必要があらうぞ？人間は其自身に於て完全である」と云ふこのワイルドの見識は「無上菩提は須らく言下に自の本



心を悟り自の本性を見不生不滅なることを得べし」と云ふ一眞一切眞、萬境自ら如々と云ふ禪者の心地をほのかに見せて居るやうに思はれる。私の謂ふ所の行乞生活の本地の風光は此の如々の心境を體得して無一物の姿を堂々として我自らのうちに現はし來る所にある。永嘉の謂ふ所の「常に獨り行き常に獨り歩す。達者同じく遊ぶ涅槃の路。調べ古り神淸うして風自ら高し。貌顇(かじ)け骨剛うして人顧みず。窮釋子口に貧と稱す。實に是れ身貧にして道貧ならず」と云ふ生死悠々たる境地を味つたものでなくては到底此の邊の消息を解することは不可能である。こゝ一切の憍慢放逸の心を離れ謙虛、卑下、柔和、溫順の德自ら流れ、花の自ら咲くやうに樹の自ら生ひたつ樣に自然に單純に自然に素朴に自然に偉大に自然に成長するのである。そこには一切の叡智が夕の星の樣に照てゐる。そこには一切の意志が深い淵のやうに沈默して居る。それは一切を所有して居る。而かも何物をも有たないのである。唯だそこには我が「我自ら」であ

る。我自らが一切である。何物の干渉も受けない。他の何物をも干渉しない。自然靈然の境である。自ら照る！こゝに一切を光被する力がある。我「自ら」である。そこに一切を受け入れる胸が開いて居る。流れて居る世界である。照らされて居る世界である。匂ふて居る世界である。「生命」が其の儘に何等の障碍もなく呼吸して居る世界である。金風體露の世界である。指月此の行乞生活を讃嘆して「平等無受無欲、法々混合して四大五蘊の去來、不去來、執受非執受、畢竟無所得の地」と云つて居る然りこゝ眞に無所得の地である。身心内外の空無相無作を成じ得たる境である。寂滅にして不着不諍の理を現身其の儘に描き出したる具體相である。「三日すれば忘られぬ」此の乞食の生活のみぞ眞の宗教生活の天地である。一切無の否定者が一切有の肯定境に蘇生し來る境界は始めて乞行の生活に於て見出し得べきであらう。

——〔了〕——



昭和二年二月十二日印刷
昭和二年二月十五日發行

體驗の宗教
〔定價貳圓四拾錢〕

著者　金子白夢

發行者　河本哲夫
東京市神田區北神保町二番地

印刷者　宮下桃太郎
東京市小石川區戸崎町九十四番地

發行所　東京市神田區北神保町二番地　新生堂
振替口座〔東京六六二七三番〕〔長野三四四六番〕

不許複製
新生堂
不許複製

## 金子白夢著作集

東洋思想研究叢書第一編　現代思想より見たる　**老子と中庸**　定價一、二〇　送料一二

東洋思想研究叢書第二編　現代思想より見たる　**行の宗教**　三祖大師「信心銘の研究」　定價二、〇〇　送料一二

東洋思想研究叢書第三編　現代思想より見たる　**無門關の研究**　印刷中

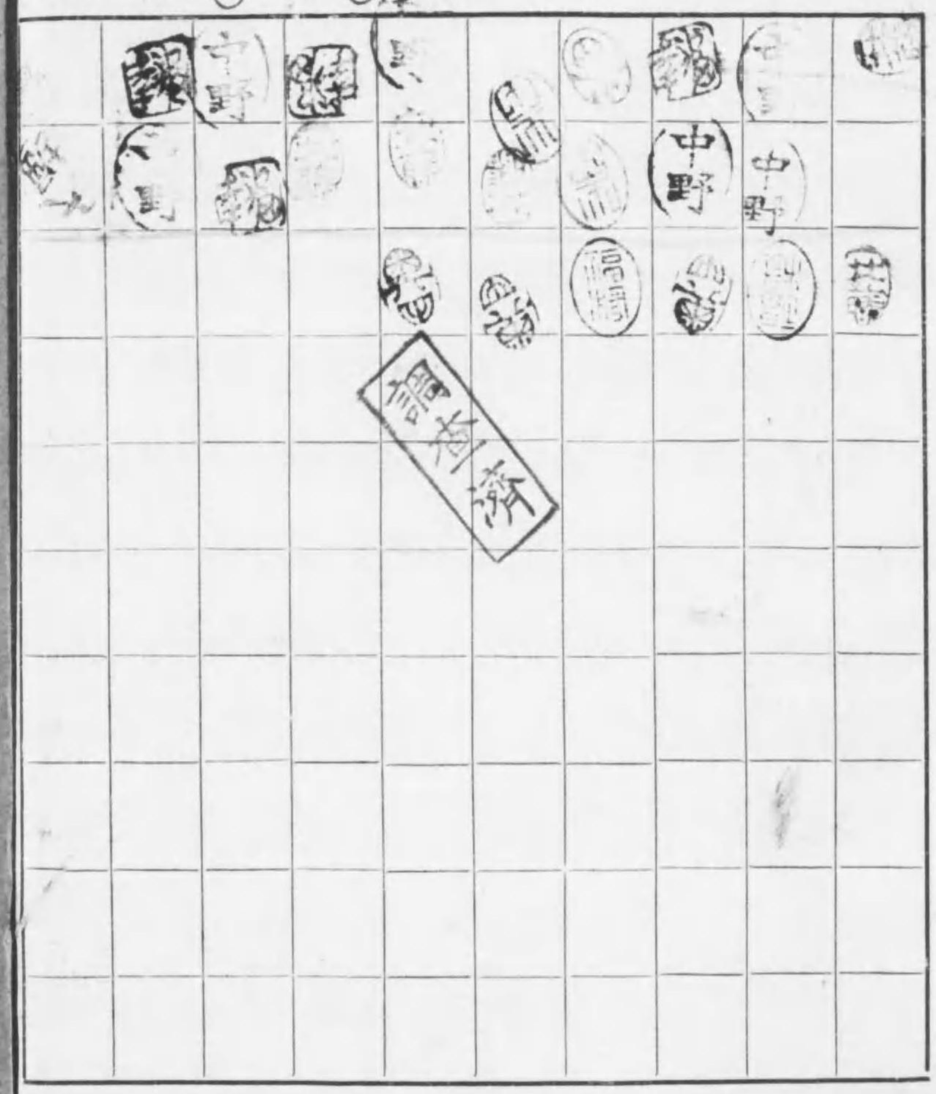
東洋思想研究叢書第四編　現代思想より見たる　**易と王陽明の研究**　續刊

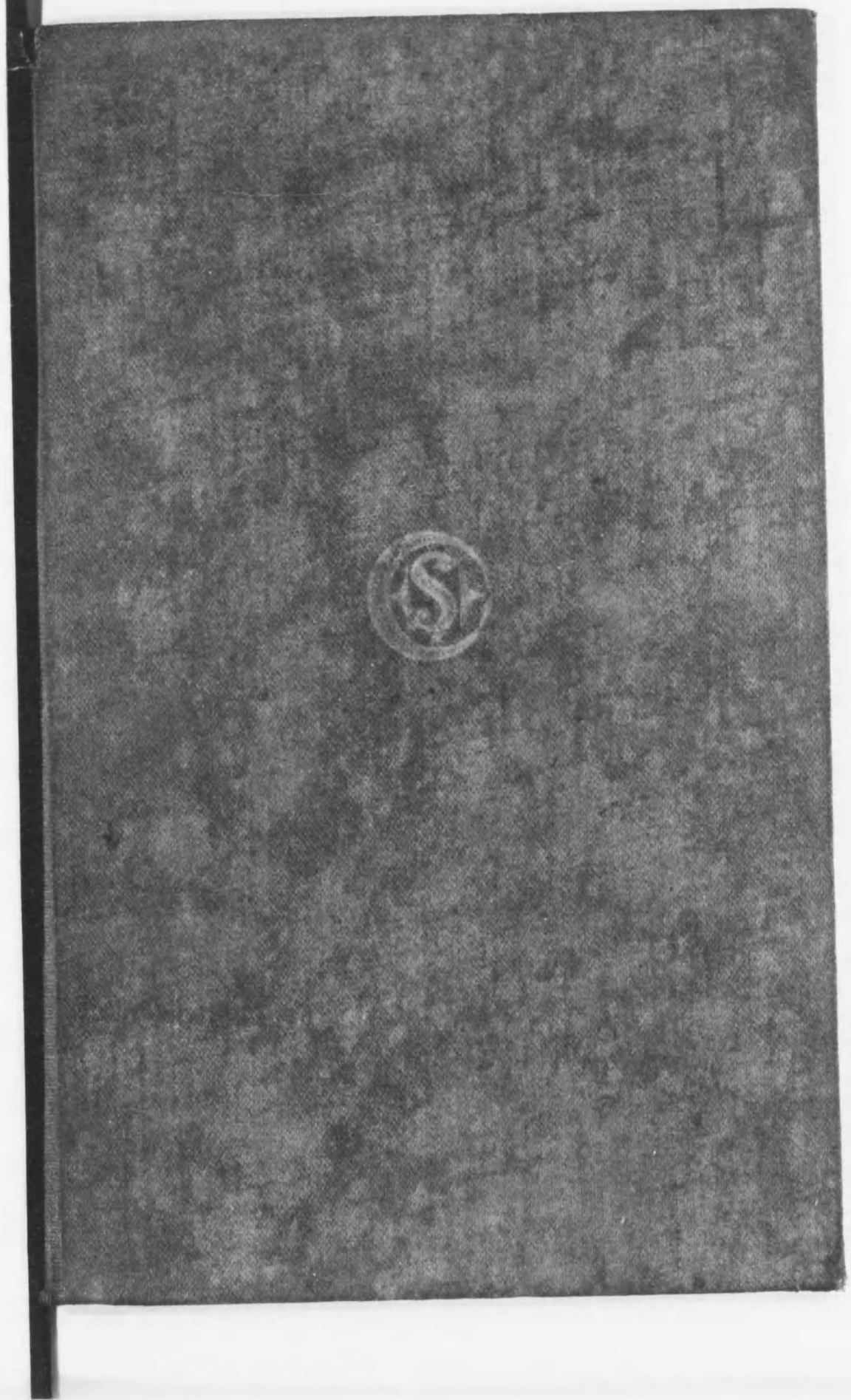
**現代思想六講**　定價一、八五　送料一二

**體驗の宗教**　定價二、四〇　送料一四

新生堂發兌

2年 5月30日



392
276

終